

昭和初期プロレタリア文化運動の組織化に伴う運動権威の形成

立本 紘之

はじめに

本論文は、昭和初期日本において共産党の影響を受けた社会運動の内部で、「権威」がどのように形成されていったのかという問題を、プロレタリア文化運動を対象に考察するものである。

プロレタリア文化運動を対象とした理由としては、当該期の運動の中で、最も広く大衆の眼に触れ得た運動であるということが挙げられる。近代日本の社会運動は、労働・小作争議や、弾圧法制への反対運動、生活改善を求める運動、いずれを取ってみても、概念としてはいかに革命遂行のために重要視されたものであったとしても、各々の生産拠点や都市などの局地的な場で展開される形のものであった。

しかしながら、文化運動によって生み出される理論・著作はメディアを通して、全国的に伝播されていくという性質を持ち、場所や状況を問わず、また直接運動に関わっていない人々にも受容され得るもの

であった。それ故に、当該期の運動の中で最も大衆の眼に触れることが可能で、大衆に広く運動の実態を示し得る運動の形であったと言えることが出来る。そうした点にこそ、文化運動の観点から日本の社会運動を考えると、言うことの意義が存在するのである。

とりわけ、日本共産党の運動との関係を考えてみると、大衆に対する「可視性」がさらに意味を持つてくることになる。というのも、戦前期の日本共産党は、一九二二（大正十一）年七月に結成されて以後、一九二四（大正十三）年初頭に解党し、一九二六（大正十五）年末に再建されるも、一九二八（昭和三）年の三・一五事件以後は組織への検挙と再建を繰り返しながら地下潜行的活動を一九三五（昭和十）年まで続けるという過程をたどっている。つまり、日本共産党が大衆に広くその存在を認知され、大衆の眼の届く範囲で活動していた期間はずか二年に満たない短いものだったのである。

そういう状況下にあった当時の大衆にとって、共産党の活動や理論を（限りなくグレイゾーンに近いが）合法的手段を通して認知出来た

のが、文化運動と、それを通して生み出され、伝播されていた理論・著作の数々であり、最盛期には月二万三千部を世に送り出した雑誌『戦旗』に代表される多種多様な出版物やプロレタリア演劇、映画などが広く人々の眼に触れ、共産党の影響下にある運動の目標や意義、実際の運動の実態を伝えるのに大きく貢献していた。

このように、共産党に影響を受けた運動の「見える」部分を広く担っていた文化運動であるが、その運動に携わる人間は、見えない党の存在をどう考え、どう影響を受け、どう行動していったのかを考えることは極めて重要である。従来の研究や運動当事者の言説では、プロレタリア文化運動、特に二八年に誕生した全日本無産者芸術聯盟（ナツプ）以降の運動は、共産党の指導を強く受け、その活動も次第に政治的偏重を強く見せていき、セクト化、教条主義化を強め、党運動の衰退と共にその力を弱めていったとされている⁽¹⁾。

しかしながら、先に触れたように日本共産党はその活動の大部分を地下潜行的な形で行っており、組織自体も検挙と再建を繰り返すような状態にあった。そうした状況で、一体どの程度の党指導が可能であったのだろうか。前衛党が大衆や団体を指導するというのはレーニン主義的概念としては存在し、運動遂行上目標とされるものではあるのだが、それが戦前期の日本においてどの程度実践されていたのか、まして直接行動団体ではない文化団体に関し、指導が明確な形で機能していたかどうかに関しては疑問符を付けざるを得ない。

だとすれば、党指導を受けていたとされる側が、指導をどう受け止めていたかを考える必要があるだろう。ナツプの中央部で長らく活動したプロレタリア文芸者川口浩は、戦後文化運動再建後すぐの時期に、

合同後のなお長い間党の直接的指導はなかった。たゞナツプが自

発的に党の線に添おうとこれつとめていたのだ。「ナツプは党の直接的指導にあこがれているだけで、大衆のなかへ実践的に入つてゆこうとせぬ」と或る有力な党員が語つたという話を聞いたことがあるが「あこがれている」とはなかなかうがつた言葉だと胸にこたえた⁽²⁾。

というような、ナツプと党に関する回想を残している。この言説に沿って考える場合、文化運動は党から指導を受ける運動であるというより、自らが党の側に歩み寄っていった運動であると言えるであろう。この川口の回想の他にも、本論文中で言及していくが、文化運動関係者が様々な局面で「党の存在」や「党の意志」を感じ取り、それを組織や個人にとって重要な判断基準として用いている様が多々見られる。つまり、文化運動が受けていたとされる「党指導」というのは、文化運動関係者が持っていた党の存在・権威を感じ取る意識を前提に、その権威が運動における様々な局面で、時にはある種恣意的に利用され、運動が動かされたという経験が、概念上の党指導とないまぜになり、戦後の語りの中で、当事者・研究者に影響を与えることで確立されていったものに過ぎないと考えられるのではなからうか。

そこで本論文では、雑誌『種蒔く人』が創刊された一九二二（大正十）年から、日本プロレタリア文化聯盟（コップ）が創設された一九三一（昭和六）年末までの、所謂文化運動の組織化時期を対象に、そうした党指導を可能にした党の権威が、文化運動組織の確立過程でどのように形成されていったのかを中心に考えていきたい。

第一章 プロレタリア文化運動組織化の端緒

第一節 プロレタリア文芸雑誌の創出

日本におけるプロレタリア文学及びプロレタリア文化運動は小牧近江・金子洋文・今野賢三らが秋田県土崎港で創刊した同人雑誌『種時く人』に起点が置かれるのが一般的である。

『種時く人』が日本の社会運動に齎したものととして、創刊のきっかけとなった、フランスの反戦平和運動「クラルテ」の紹介、コミンテルン（第三インターナショナル）の理念紹介⁽⁴⁾、そして当時の社会主義理論雑誌と合同で行った「ロシア飢饉救済運動」⁽⁵⁾が挙げられる。

また同誌にはプロレタリア詩・小説は勿論、プロレタリア文学・文学者のあり方に関する論争の萌芽ともいべき評論も掲載された。当時サンディカリズムの傾向の元に発展を遂げていた労働運動から、知識人排除の動きが顕著に見られるようになったため、知識人には自分たちが運動の中で果たすべき役割、ひいては自分たちの有用性を訴える必要性が生まれていた。芸術系知識人の場合、主な仕事は作品作りであり、その作品を階級運動の役に立てるためにはどうすればいいかという点に関して『種時く人』誌上にも種々の意見が寄せられた。

例えば二二年一〇月号の村松正俊「労働運動と智識階級」では、知識階級は社会分業のままに従って知識を取り扱うことで生活に尽すものであると前提した上で、知識階級排斥について、

もしもそれがブルジョワジの智識階級を排斥するといふのならば議論はない。しかしもしもそれ自身に於ける智識階級をさへも排除せんとする意味であつたならば、それはあまりに浅見である。

(略) しかしながら智識階級が生活そのもの、ために真理を創造するならば、決してかかる誤謬に陥るわけではないのである。資本主義の弊を指摘し、革命運動の真理なることを認めるに吝かでない筈である。⁽⁶⁾

と述べ、生活のために役立つという一線を踏み外さない限り、知識階級は階級運動陣営の一員であると位置付け、その有用性を説いている。また二二年六月号の社説「芸術運動に於ける共同戦線」⁽⁷⁾では、「多くの運動が当分守勢的立場にあるなかに、最近の芸術運動ほど、ともかくも攻勢的態度を示めしてゐるものがない」とした上で、そうした情勢に樂觀は許されず、反逆精神と階級闘争の目覚めに力を入れるよう訴える。そして芸術家の運動が頼み甲斐ないと見なされようとも、共同戦線という作戦上無効なものでないのだから、運動における芸術家の役割を軽視するような非難に抗していくことが説かれている。

運動における、アナ・ボル対立を止揚し、共同戦線として社会運動を遂行することを目指す動きが山川均の所謂「方向転換論」以降盛んになっていた状況下において、共同戦線だからこそ自分たちは有用であり、些細な思想対立に左右されず、芸術という両者からも受け入れられ得る、また大衆へも有用なアピールを独自の観点からなし得るといふ形での運動者への売り込みの形をこの文章に見て取れる。

同号の平林初之輔「文芸運動と労働運動」⁽⁹⁾では、最近の階級芸術運動を「階級闘争の局部戦」と位置づけ、「階級戦の主力たるブルジョアとプロレタリアの決勝」によってのみ解決される運動であるから、文学者にとつてはそういう限定のされ方は不満であるかもしれないが、そういう人間は「階級芸術の意義を理解し得ず、調子に浮かされて吾知らずその運動の中に飛び込んでゐる周章者」であり、文芸運動とは

「あまり栄へない運動で、決勝力をもたない。一種の補助運動、牽制運動だ。この運動にたずさはる人はあまりに自己の役割を過大視してはならない」と述べ、文壇や芸術界進出の野心のようなものを抱えて階級芸術にやってくる不純分子を非難している。

文芸運動の有用性が正しく發揮される場所と限界点を指摘すること、目指すべき運動の明示をすると共に、運動意識を持つものと一種の賑やかしの存在との峻別を図ることで、運動への献身を示し、実際労働者運動家などから投げかけられていた「實際運動を安全なところから傍観し、飯の種にするような存在」的な文芸運動者に対するイメージの払拭を図る意図が、この平林の文章から読み取れる。言うならば敵・味方それぞれからの、芸術などやらずに実践運動を實行すべきではないかというような文芸運動家に対する批判¹⁰⁾に対する明確な自己のスタンスの位置づけへの試行錯誤の一つの現われである。

平林と同じく、第一次共産黨員であり、文芸評論家としても活動していた青野季吉は、二三年二月号「階級闘争と芸術運動」で、無産階級全解放の日まで続く戦いの永続性について述べ、何らかの小さな完成を求めたり、表面上に現われる運動の停滞・不振だけで判断するような物言いを「ブルジョアの筆法」として退けた上で、芸術を宣伝の道具として使うという文芸運動に対する批判に対して、

「永遠」や「尊貴」などの目つぶしを喰つてゐる連中は、自分たちは何かしら自由な、独立な立場にあつて、尊貴なもの、ために奉仕してゐると思ひ込んでゐる。しかし、さう思ひ込んでゐることとそれが、ブルジョア支配―一切の階級対峙の社会の教化に囚はれてゐるのだと云ふことを知らない。(略)彼等はそれに気がつかず、革命力の前に背骨を見せてゐる事において、無意識に、

支配階級の宣伝をやつてゐるではないか。⁽¹¹⁾

と述べ、芸術の純粹性・超然性の名の下に活動し、芸術を通して社会の眞実を覆い隠す行為こそが、芸術を反革命の宣伝として使用する行為であり、自分たちがやっている革命の宣伝行為とベクトルが違うだけに過ぎないと位置付けている。階級芸術のアジプロ(煽動・宣伝)作用を正当化すると共に、その積極的展開を促す意図も込められており、芸術によるアジプロというその後のプロレタリア文化運動の基本スタンスの端緒がこの時期既に見え始めていることは興味深い。

雑誌『種時く人』はその後、関東大震災による発行自体の困難化や、震災後の社会主義運動全体の一時的退潮などから、「帝都震災号外」(三年九月)、及び亀戸事件に関するルポルタージュ「種時き雑記」(四年一月)を出した後、その活動に終止符を打つことになる。

同時期の無産運動全体においても、二三年五月の検挙と震災の影響で共産党が解党した一九二四(大正十三)年以後、運動面での自由主義・穩健的方面への転化(リベツ化)¹²⁾が起こっていた。解党経緯を知っていた平林が強く自由主義からの出発を主張し、種時き社解散を後押ししたという話¹³⁾もその線に沿って考えれば自然な流れである。

『種時く人』廃刊後、その同人達によって事実上の後継誌『文芸戦線』が二四年六月に創刊され、『種時く人』を通して運動の一翼に加わった文化人たちはこの雑誌を通じて活動を続けていく。

二〇年代中盤のこの時期、日本の文学・芸術全体を見ても同人雑誌が多数創刊され、大戦後のヨーロッパの前衛芸術や現代文学の日本への移入や、それを元にした独自の創作活動が盛んに試みられていた。

プロレタリア文学の本格的な勃興も『文芸戦線』を中心に始まり、葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」「海に生くる人々」、林房雄「林

檜」、黒島伝治「權」などの名作・意欲作が次々生まれた。そのことにより「掛け声だけが先行し作品が伴わない」というプロレタリア文学に対するマイナスイメージを払拭し始めることが出来たのである。『文芸戦線』は翌一九二五（大正十四）年新年号で、資金繰りなどの問題から一時休刊し、同年六月から再刊されるという事態も発生したが、プロレタリア文芸確立の中軸としてその活動を強めていった。

第二節 福本主義の登場と運動権威成立の萌芽

ここで一端文化運動から離れ、一九二〇年代の日本の社会運動理論に話を移したい。というのも、これ以後の文化運動を考えて行く際、一九二四年以降の日本の社会主義運動に大きな影響を与えた福本和夫とその理論について避けて通ることは出来ないからである。そして福本の理論が影響力を持つようになった状況というのは、社会運動における権威の形成過程を考察する上で非常に重要な要素となるものである。故に、福本の理論とその周辺について見ていくことにする。

福本が「経済学批判のうちに於けるマルクス『資本論』の範囲を論ず」を雑誌『マルクス主義』に寄稿し、左翼論壇に登場したのは二四年一月二月であり、以後福本は、河上肇や柳田民蔵といった当時のマルクス主義社会学者批判を同誌上で展開していった。

二五年六月号の「欧州に於ける無産者階級政党組織問題の歴史的発展（三）」で福本は、前々号から展開して来た欧州の社会主義運動史を語る文脈中で、初めて本格的にレーニンの組織論に言及した。ここで福本は、「階級意識を意識したる無産者の組織と不可分の結合したるジャコピン党」組織のため「結合する前に先づ、きれいに、分離」⁽¹⁴⁾することの重要性に初めて触れている。そして、

ボリセヴィズムスは、もしも、メンセヴィキー即ち機會主義者、修正主義者、社会的偏狭愛国主義者を征服し且つ彼等を無産者前衛の政党（共産党）から、冷酷に放逐することを、予め、一九〇三年―一九一七年に学ばなかつたならば、一九一七年―一九一九年に於て、有産者を征服しえなかつたのであらう。⁽¹⁵⁾

と述べ、ロシア革命の勝因が革命の前段階における分離による組織純化にあることを強調した。さらに、

ロシアでは革命の当初、十五ヶ年間の経験、鉄の如き規律ある組織の革命党が存在した。独逸では、革命の当初まで、革命的分子は、機會主義的大衆党のなかの「意見の相違」にすぎなかつた。

―真に革命的なる政党は、かの十一月転覆（Novembersturz）一九一八年十一月）以後、漸くはじめて組織せられた。しかしそれは、かの独逸革命の気運を真に無産者の革命にまで導き進めようには、あまりに遅かつた。⁽¹⁶⁾

と述べ、ドイツ革命では前段階における分離による組織純化がなされなかつたことが敗因という点を強調した。このように、福本はロシア革命とドイツ革命を例に、「組織の純化」という、ある種わかりやすい革命の成否を分かつ要因を提示した。日本の社会主義運動に、「なをなすべきか」を明確に提示したことこそ福本の画期性であろう。

加えて、二五年五月、労働組合運動において日本労働総同盟から、渡辺政之輔らの主導で左派が分裂、日本労働組合評議会を結成するという事態が起こる。この直後に福本は分離・結合について語り始めている。言うなれば、直近に起こった分離の事実が、福本の正しさを後押しするような事態が起こっていたのである。⁽¹⁷⁾さらに翌一九二六（大正十五）年の無産政党結成に関しても、同年初頭に成立した労働農民

党が当初の左派排除から、「門戸開放」を経て一二月に右派・中間派独立と言う形で、社会民衆党・日本労働党・労働農民党の三党鼎立となった。これも「分離」の顕在化であり、客観情勢の変化が福本理論に適合した一例と社会運動に同調的な人間には見えたであろう。

福本の「分離・結合」論を彼自身の言葉を軸にして本格的に述べた文章が『マルクス主義』二五年一〇月号の「『方向転換』はいかなる諸過程をとるか我々はいまそのいかなる過程を過程しつゝあるか」（北條一雄名義）である。この文章では、「精神的闘争」の段階から「政治的、戦術的闘争」の段階への移行の必要性が語られた後、

我々は、上来研究し来た如し、今や、始めて、結合―全国的―大政党樹立の必然を当面してゐる。この形勢が二段の決定を導く。

第一に―それにも拘らず、否、それだから、我々は先づマルクス主義的要素を「分離」し、結晶しなければならぬ。

第二に―この原則を戦ひとるがための闘争は当分理論的闘争の範囲に制限せられざるをえぬであらう。¹⁸⁾

と述べられている。さらに続く文章で、こうした流れの例として、社会主義同盟から一大無産党迄の流れ、組合運動（総同盟分裂）から評議会成立、そして来るべき結合の流れを上げ、その過程で『マルクス主義』誌上の理論闘争を通しての「機会主義」からの分離が謳われた。

この論文の重要な点としては「分離・結合」について福本の言葉で明確に語られたということ、そして当面の闘争として「理論的闘争」に限定したものが目標とされたということである。前者は、「福本主義」と称される運動理論体系がこの時点で本格的な出発を見せた点で重要であり、後者はこれまで運動の積極的局面から排除されていた学生・インテリ層に運動への没入の道を開き、文化運動・学生運動に発

展と飛躍の機会を与えることとなった点で重要である。

福本理論の本格化は、社会主義運動家に求められる物の変容を招いた。前掲の二五年六月福本論文「欧州に於ける無産者階級政党組織問題の歴史的發展（三三）」においては、レーニンの文章を引用する形で、「鉄の如き規律」によって貫かれ、理論的に純化された共産主義者組織による前衛党のみが革命を正しく遂行し得るということが強く強調されていた。また、「大衆との結合」も前衛側が意識し、理解するという働きかけに限定されており、正しい前衛による正しい指導を大衆が経験的に会得するという形が志向されるものとなっていた。¹⁹⁾

つまり、福本主義に基づく社会主義運動とは、共産主義運動を志向する者が理論的に自己修練を積み「職業革命家」を目指し、その過程で社会・大衆を把握するという運動の形なのである。こうした運動は、理論の体得が優先されることや、「自己修養」という要素を持つ点において、高等教育経験者層にとって運動の没入への門戸を開くことに繋がる一方で、実践面においては職業革命家が経営拠点の外から運動を主導すると言う形を生むことになる。

これまで述べて来た福本の理論、とりわけ分離・結合に関するものはその元をたどれば、福本自身も多数引用しているレーニンの理論、中でも『なにをなすべきか』（一九〇二）に代表される、レーニンを始めとするボルシェビキがロシア社会民主党内で分離結合による革命組織の純化を図った時期の理論に起因するものである。当時レーニン始めロシア社会民主党の中軸メンバーはロシア国外を拠点に、機関紙発行などをベースとした運動を展開しており、レーニンがそこで目指したものは自らを「職業革命家」とするための修練であった。そうした意識を発現させる形で書かれた『なにをなすべきか』が、福本和夫

の言葉借り、次いで日本語訳される形で（ドイツ語教養のある高等教育経験者層はそれ以前から独訳版を読むことが可能であったが）日本の運動に登場したのが、二五年から二六年にかけての運動の大きな変化と言ってもよいだろう。この時期はレーニンという革命の一大権威に担保された存在として登場した理論家が、客観的情勢に後押しされ、名実共に権威化していった時期としても重要なのである。

当時無産者新聞社で活動し、党再建後運動の中核で活動した浅野晃は、後年の回想で、レーニンの仕事の最初の基礎が「職業革命家」を作ったことであり、それを最大限に示した著書『なにをなすべきか』が読まれるようになると、それ以前の世代と異なり「職業革命家意識」が純粹な若者の間に入り込んでいったと述べている。⁽²⁰⁾ こうした運動家意識の誕生は、職業革命家のあり方を規定するだけでなく、「模範的共産主義者」としてのあり方を追求し、そうしたあり方をとる人物を称揚し、権威化する方向へ、社会主義運動を志す人々の意識を向けるようになったという大きな変化の創出を意味する。そういう意味でも、福本主義の齎した運動における変化は大きいものである。

福本の登場・レーニン理論の受容の本格化という変化をこれまで見て来たが、理論面においては、もう一つ大きな変化がこの時期生まれていた。主に学生運動などにおいて作用した、石堂清倫曰く「理論上の大転換」⁽²¹⁾とは、スターリン文献の日本への移入である。

スターリン『レーニン主義の基礎』（一九二四）はまさにこの時期日本で読まれるようになり、社会科学研究団体における研究テキストとして、マルクス・エンゲルスやレーニンの著作だけでなく、福本の著作や、コミンテルン決議の訳文、そして『レーニン主義の基礎』が広く読まれるようになっていった。言うなれば、レーニンに担保され

た福本と同時期の理論面において、スターリンによる「レーニンの読み方」が最大の解釈の権威になっていったということである。

石堂清倫は後年の回想で、『レーニン主義の基礎』に関し、当初「うさんくさい」と感じつつも、スターリンは「ボルシェビキ党の書記長」で、「非マルクス主義的なものがボルシェビキ党の書記長になるわけではない」のだから、彼の書いたものが、「うさんくさいとかわからない」というのは、こっちがまちがっているんじゃないだろうか」「こっちのいたらないせいだ」と最終的に考えるに至ったと述べている。⁽²²⁾

マルクス主義的研究に触れて来た人間として、一見したところで疑問を感じざるを得ないものであっても、著者が「ボルシェビキ党の書記長」ということで、そうした疑問は自らの運動者としての未熟さであるという方向に向かってしまおうと言う状況が生じているのである。ロシア革命の実行主体であるボルシェビキ党、その要職につく人間がまとめたレーニン主義の教科書である『レーニン主義の基礎』はこうして権威の塊として日本の運動者の前の前に現れることとなった。これもまた模範的共産主義者に対する権威が日本の運動において大きな影響力を持つ状況の到来を現す一例と言えよう。

スターリンの権威に関しては、この時期一般ジャーナリズムの観点から出されるソ連関連の書物によっても強調される傾向があった。例えば布施勝治『レーニンのロシアと孫文の支那』という著作では、布施がスターリンを訪問した際、

ス氏は極めて真摯な態度で

レーニンはわれ等の恩師である。われ等ポリシエウイキーはみなレーニン先生の弟子である。

と私に語った。

ボリシエウイキーにとつてのレーニンとは、の政党首領でなかつた。彼は実に共産党の党首であつたと同時に、黨員のために二人とない恩師であつた。彼はレーニズムの開祖であつて、これをボリシエウイキーに教へたのである。²³

と語つたという記述がある。また、トロツキー派との抗争に關しても、幹部派のスターリン氏やブハーリン氏にしても、また反対派のジノーウイエフ氏やカーメネフ氏にしても、双方共に必らず、レーニン全集の抜萃を引用し、それを論拠として争ふ。ボリシエウイキー党内、左右いづれの派にもレーニズムは動かすべからざるものとなつてゐる。両者はたゞレーニズムの解釈の相違について争ふのである。勿論その裏面には、個人的の勢力争ひ等の事情も、潜在してゐるが、それにしても、レーニズムそのものに向つては、何人も真つ向から、叛旗を翻へさうとしない。外様大名の筆頭たり、またトロツキズムの本尊たるトロツキーですら、レーニズムの根本原則の前には頭をあげ得ぬ。²⁴

と述べられてゐる。こうした記述から、スターリンの権威に關しては、この時期一般ジャーナリズムの観点から出されるソ連関連の書物によつても強調される傾向があつたということがわかる。また断片的に伝えられつあつたロシア共産党内の内訌に際しても、主流派として、レーニズムの道を外れたトロツキー・ジノヴィエフ・カーメネフらと戦う「レーニズムの使徒」スターリンの姿が垣間見られる。

要するに、二五年から二六年にかけて、日本のロシア革命理論受容の局面において、レーニンの原典と、スターリンによる解釈を踏まえた読み方がほぼ同時に齎されたという状況が生まれており、レーニン

の原典は福本和夫による引用・適応が並行的に進んでゐた。

つまり、革命の権威レーニンに担保された福本という構造と、現在進行形の権威であるスターリンによつてさらなる担保がなされたレーニンという構造が同時に日本において成立してゐたのである。この二重の権威が福本理論の受容にプラスに働き、福本理論の正しさが現実の運動状況に示されることで、福本の背後にあるレーニン・スターリンの権威をも更に強固なものとするという形で、日本の社会主義運動における権威構造の顕在化が進んでいったと考えることが出来る。

第三節 文化運動の組織化と変容

こうした状況を踏まえた上で、当該期の文化運動を見ていく。

二五年から二六年にかけては、普通選挙法の成立と、それに伴う合法無産政党樹立運動が盛んになった時期であり、そうした動きに伴い社会運動全体が組織化した運動へと変化していく。文芸運動もその影響と無縁ではなく、二五年二月、『文芸戦線』同人を中心に日本プロレタリア文芸連盟（プロ文芸）が結成された。プロ文芸はその内部に演劇部などの部局制を採用し、雑誌同人の寄り合い所帯的活動から、より専門性を高めた活動形態へ移行することになった。

また、『文芸戦線』が創刊された同じ二四年には講談社の雑誌『キング』が創刊され、瞬く間に発行部数を増やすと共に、掲載された小説・読み物は多くの大衆に受け入れられ、大衆文芸・通俗小説の流行現象が加速してゐた。こうした文芸の大衆化という状況に対しても、プロレタリア文芸の側も対応を迫られていくことになった。

例えば『文芸戦線』二五年八月号の林房雄「種々の言葉」では、無産階級の感情を組織し、理想をかかげ、進路をしめす、これぞ

無産階級芸術の第一義的任務。大衆化はその必要よりする一の方便のみ。又大衆化は通俗化の意にあらず。資本主義の懐に眠むる大衆の意識に妥協するにあらずして、彼等に工場労働者階級の鉄の如き情熱と意力とを啓示するの意なり。興味本位の欲求は市民文化末期の一現象たるにすぎず、大衆は興味を欲す。されど無産階級の欲するものは解放なり。²⁵

と述べられ、大衆化はアジプロの方便であると明確に断言されている。資本主義社会の中で眠っている（階級意識に目覚めない）大衆という大衆観、その観点に基づく大衆と（意識者たる）無産階級の峻別がこの時点で既に明確にプロレタリア文化人の中から現れてきていることが伺えよう。林房雄は当時、解党後の共産党再建機関であったビューローの事実上の理論機関誌ともいえる雑誌『マルクス主義』の編集に携わっており、厳密な意味では当時の文化人の思想到達状況を反映しているとは言いがたい。しかし、大衆観やあるべき革命主体の像が文化運動関係者の中で描かれ始めていたということは重要である。

こうした状況下で、『文芸戦線』誌上に注目すべき論文が掲載される。青野季吉「自然生長と目的意識」（二六年九月号）²⁶である。

この中で青野はプロレタリア文学の成立をプロレタリア階級の成長と共にその表現欲が成長したためであると規定し、その上でプロレタリア文学とプロレタリア文学運動の発生の時間差を、目的意識、つまりプロレタリア階級の闘争目的の自覚の成立の有無に置く。そして、自然成長を導き、目的意識の体得まで引き上げる力こそがプロレタリア文学運動だと位置付ける。そしてプロレタリア文学運動が「第二の闘争期」にきていることを前提とし、運動の活性化を促すために、自然成長段階で文学を停滞させることなく、目的意識を持って作品を作

り、大衆に目的意識を植え付ける必要性を訴えている。

前述したように二五年から二六年にかけては、普選法の成立により、これまで政治と無縁のところをいた多くの大衆が選挙権を行使し、政治に関与出来るという事態を前提に、大衆の政治教育という問題が大きく浮上した時代である。無産階級運動陣営では、左翼系知識人・総同盟・日本農民組合などが中心となって無産政党樹立のための討議・運動が盛んに行われた時期であり、二六年の年末には三党分立という形ではあるが、合法無産政党が日本で初めて本格的に始動した。

こうした背景を元に、政治と初めて明確に、自分の意思を持って接触しなければならぬ大衆に対し、階級意識というイデオロギーを自覚させ、体得させることを促すような作品作りをすることを企図した文章を青野は書くに至ったわけである。加えて、こうした客観的情勢と青野を繋ぐもう一つのファクターが、レーニン『なにをなすべきか』²⁷である。前述した福本の二五年六月・一〇月論文、雑誌『マルクス主義』二五年八・九月号への抜訳掲載などで知られていたこの著作を二六年に全訳したのは他ならぬ青野である。後述するように、この後の芸術団体分裂の原因ともなる福本和夫の理論である「分離・結合論」は『なにをなすべきか』に代表される初期レーニンの組織論の引用・解釈に基づくものであり、期せずして対立者同士が同一思想を根拠としながらも分裂するという事態が生まれることになる。

祖父江昭二は「客観的には」という留保条件をつけながら「青野の『目的意識論』は（山川的であるよりは）福本的な『方向転換論』の役割を果たした」と述べているが、その考えを踏襲すると、政治運動高揚・政治組織建設期に持ち込まれたレーニンの前衛党建設理論が明確な指針を与えた結果、実践運動方面たる党再建の方面で顕在化した

のが福本理論であり、文化運動方面で顕在化したのが目的意識論だったという二つの戦線での顕在化の形として捉えるべきだろう。

青野論文に代表されるような、イデオロギー純化の波は芸術団体組織にも及び、二六年一月プロ文芸は日本プロレタリア芸術聯盟（プロ芸）に改組し、小川未明・壺井繁治・秋田雨雀らアナキスト及び非ボルシェビズム系の人々と袂を分かち（アナキスト系作家は新たに日本無産派芸術聯盟を組織）、同時に中野重治・鹿地亘ら東京帝大などの学生・知識人層を中心とした芸術団体マルクス主義芸術研究会（マル芸）の構成員がプロ芸に新たに加入とすることとなった。

マル芸の構成員には、二五年から党再建ビューローの影響の下、発行されていた『無産者新聞』の編集の仕事に携わり、文芸欄の執筆などを手がけていた者もいた。²⁹ 実践的な文筆活動に携わると共に、新社会など学生社会思想研究団体で理論的に鍛えられた人々が文化運動に新たに加入したことは文化運動に変化を齎していく。

マル芸の構成員が『無産者新聞』と関係を深くしたこともあってか、『無産者新聞』が文化運動の局面においても一権威として確立されることになる。それを端的に表した文章が『文芸戦線』二七年二月号の林房雄「『無産者新聞』の文芸版」である。林もまたマル芸に所属し、『無産者新聞』に読み物を寄稿していたが、この文章の中で林は、「『無産者新聞』は今のところまだどの党にも属してゐないが、その注文または命令によって、吾々が芸術的活動をやったことは、無産階級の党の命令によって詩を書き、絵を書き、小説を書いたことと同じとみてい、そして吾々はそうした行動に非常なる喜びを感じた。

（略）プロレタリア的政治戦線への直接的参加は、決して吾々の

作品の芸術的価値を低下させはしない。否むしろ、雑誌業者の注文によっては決して味ひ得ない芸術的感興を、吾々は党や組合の命令の中に感じ得る。（略）何故ならば吾々の意識は無産階級運動の前衛の意識と一致してゐるから。

（略）吾々のインスピレーションは中央委員会から来る。新興し闘争しつ、ある階級人類の歴史に真の黎明を齎す偉大なる集団の意志と熱情の中にある。微笑せずにをれようか。³¹

と述べた。言うならば概念的な前衛党の要請と同列に『無産者新聞』の依頼が位置付けられており、文芸者は党や組合の命令を受けることで、運動の一翼を担い得るといふ、ある種の高揚感にも似た感覚が生まれていたのである。かなり感情的で概念的な物言いはあるが、当時の文化運動関係者の中に『無産者新聞』を権威として仰ぐ志向と、そこから来た依頼を党運動だといふ意識で受けるといふ精神構造が成立していたことが伺える。こうした「党運動」に対する錯覚視的な意識は、文化運動における権威意識の本格化の萌芽とも言えるだろう。

プロ芸の誕生は、マルクス主義を闘争の理論として受け入れることが左翼文化運動組織内で明確に求められるようになるという変化の顕在化であると言えよう。以前のような共同戦線的行動をとってはいられない時代が来たといふ意識の根柢となったのは、労働組合運動中心の経済闘争から、政治闘争の時代への移行の時期を迎えたといふ情勢認識である。前述の無産政党結成と、その党がリードする合法無産運動、とりわけその最左派である労働農民党への共産党系勢力の加入による地下からの運動指導という活動の活性化が、政治闘争の喫緊性と重要性を増していたが故の方針転換である。表向きには党勢力の関与は明白なものではなかったが、政治闘争への転換は『マルクス主義』

『無産者新聞』などを通して広く流布されるようになっていた。

こうした一連の流れについて述べた文章が『文芸戦線』二六年一月号の山田清三郎「第二の発展期と『文芸戦線』」である。この中で、これまでの『文芸戦線』が無産者文芸の漠然とした共同戦線の機関であったことについて述べた後で、

今や、資本主義社会の発達に伴ふ、必然的矛盾であるところの新興無産者階級の勢力の拡大に伴つて、急速なる没落過程をたどりつゝある、支配階級の必死的攻勢は、無産者階級それ自身の階級意識の発達と相俟つて、従来主としてその対象を、経済闘争に置いてゐたところの我国無産者階級の運動をして、愈々社会主義的政治闘争の段階にまで進展せしむるに至つた。その結果、これまで、一般無産者階級の運動から、それは全くといつてもいゝ位に、まゝ、子扱ひをうけてゐた無産者文芸も、その闘争上の必要から、こゝに始めて、無産者階級運動に於て、重要な役割をもつものであるとの認識を、一般にもたれるに至つたのである。⁽³²⁾

と述べ、政治闘争段階への移行に伴い無産者文芸運動が、運動の一翼として認識されるに至つた結果、共同戦線意識はもはや「一種の癌」「大なる桎梏」であるとして「勇敢に止揚」することを訴えている。

ちなみに、無産者文芸運動の重要性を一般に認識させるに至つた出来事として山田は、同年一〇月の無産者新聞社主催のイベント「無産者の夕べ」を挙げている。これは、音楽・講演をメインとした無産者文芸公演会で、複合的無産者芸術披露の組織イベントとしての最初の試みであり、この成功を元に村山知義・千田是也らは同月、プロ芸傘下の演劇団体として前衛座を旗揚げする。学生を中心とした若いプロレタリア文化集団による大規模な公演の成功は、プロレタリア文芸そ

れ自身が確固たる一つの社会的存在として認知されたという認識を生じさせるには十分な実績である。⁽³³⁾

山田論文以後も『文芸戦線』を中心にこうした観点からの文芸論が噴出していく。時期は前後するが『文芸戦線』二六年一月号の赤木健介（伊豆公夫）「智識階級世界観の分裂過程終了⁽³⁴⁾」では、無産階級の成長で起る政治闘争が階級同士の決戦期を急速に齎すとした上で、「この決戦期を前にしては右か左かの二途しかない」と述べられ、作家・読者共に労働者の比率が増えつつあることなどに、⁽³⁵⁾真の無産階級のプロレタリア文学の発見を見た上で、無産階級運動に投じてきた智識階級（非ボルシェビズム的智識階級の人々全般を指す）の人々は階級運動の指導精神と運動の発展に引きずられ、「真に大衆の要求するような」共産主義的文学が生まれてくるとし、これこそ大発展であり新しい再出発だと位置付けられている。また、一九二七（昭和二）年一月号の谷一（太田慶太郎）「無産者文芸の質的転換」では、

我々の当面目標は先づ、無産階級運動及び、無産者文芸運動の現在に於ける発展段階の究明、並にその相互の関係を真に無産階級的に解決することで行かなければならない。かくて吾々は、この問題解決に於ける見解の対立、理論的闘争によつて、自らを無産者文芸家の左翼—全無産階級政治闘争の一翼—として形成せしむるに至であらう。而してこの理論的闘争を過程することなしには、我々は、全無産階級政治闘争意識を戦ひとすることは出来ないであらう。従つて、全無産階級の感情を自らのものとはなし得ないであらう。⁽³⁶⁾

と述べられている。理論闘争を「過程」しなければ自らを政治闘争の一翼として確立し得ないという考え方は、福本和夫の引き写しに他な

らない。理論の確立を強く求める志向は二月号の社説（後述する林房雄の手によるテーゼ）にも見られ、「資本主義が社会の全機構に浸潤し、これを染色してゐる時、社会主義作家が無意識的に、衝動的に、行きあたりばったりに芸術活動を行つたら、知らず知らずの間に資本主義的イデオロギーの前に頭を下げることになる。」というように、前述の山田論文の「支配階級の必死的攻勢」という表現と同様に資本主義的支配体制の強迫的包圍網が、確実に発展しつつある階級運動の前に立ちほだかる状況と、それを打開するためには、指導理論に貫かれた組織を作る必要性の強調という論理、つまり政治的プログラムから来る前衛党組織論が文芸運動内にも浸透してきたことがわかる。

加えて二七年二月頃、つまりテーゼを提示するような誌面になつて以降から、ソ連の理論家、例えばデボーリンやブハーリン（無論レーニンと言うまでもなく）などの引用を踏まえた記事が『文芸戦線』誌上で増え始めた。五月号・六月号に「文芸の領域に於ける露国共産党の政策」と題してロシア作家同盟会議でルナチャルスキーらが主導したテーゼ（千田是也・蔵原惟人・外村史郎訳）が掲載されたのもその流れに位置付けられる。

思想的根拠としてソ連の最先端の運動理論・哲学思考などを使用することで、文芸理論の政治的水準向上を図る狙いが顕在化した結果の産物であろう。加えて、前述したスターリン理論の受け入れのロジックと同じく、ソ連の理論家・作家という権威が顕在化し始め、その理論を援用することで自身の言説がソ連の権威による担保を得るという状況が生まれていると言えるのである。

谷一は、中野重治や鹿地亘らと同じく新人会員・マル芸の構成員で、福本主義の影響をこの時点で如実に受けていた。彼等若いマルキスト

文芸者と『種蒔く人』時代から運動を牽引してきた青野たちプロレタリア文芸者の間の思想的亀裂は、若い世代の論者の投稿が増えていくに従い大きくなり、プロ芸の組織的合一にも影を落としていく。

第二章 文化運動組織の「分離・結合」とその背景

第一節 文芸組織分裂・鼎立の時代

二七年六月、青野季吉・葉山嘉樹・前田河広一郎など労働者系作家及び蔵原惟人ら福本主義を指導理論として承服し得ない人々がプロ芸を除名され、新たに労農芸術家聯盟（労芸）を結成した。除名された人々が編集部を主導していた『文芸戦線』は労芸の機関誌となり、プロ芸側では新たに雑誌『プロレタリア芸術』を創刊、機関誌とした。分裂の直接の契機³⁷としては、前述した若い世代が主導する形で『文芸戦線』を本格的に運動の機関誌とすることを企図し、『文芸戦線』編集部に断られたことが引き金となり、『文芸戦線』編集部ひいては、プロ芸での活動歴の長い青野季吉ら「長老連」の封建的体質への抗議³⁸という形で、彼らを除名するに至ったことが挙げられる。

具体的にかつ、論争の面から見ていく。『文芸戦線』二月号から、当面する重要問題に関してのテーゼを掲載することとなり、その第一弾が林房雄の「社会主義文芸運動」³⁹であった。

林はまず自然生長性と目的意識の再確認として、政治的意識を把握した集団である前衛が大衆の無意識的行動を指導したとき、大衆の自然成長的な行動は社会主義的性質を帯びるとし、作家は政治意識と、社会主義的世界観を把握し、真の社会主義文芸を作り上げねばならぬと述べる。次いで、芸術は本来持つ感情・意志・観念の社会化の作用

によって、人々の意識を階級的に組織化するものであり、作品が芸術的に優れているほどその組織化力が強いいため、社会主義文学において芸術価値を追求しても構わないとしている。

このテーゼに対して、『無産者新聞』二七年二月五日の文芸欄に鹿地亘の「所謂社会主義文芸を克服せよ」という批判文が掲載された。この中で鹿地は、林論文の社会主義文芸の定義付け自体が、切り離された文芸運動の発展を以って階級的使命を行使することであり、運動の現段階が規定する役割からの逃避、つまり、社会主義を装いながら革命的行為から逃避する小ブルジョア意識の表現であり、文壇への脱落だと述べる。その上で芸術の役割は、「其の特殊の感動的性質に依って、政治的暴露に依って組織されて行く大衆への進軍ラッパ」であり、大衆を組織するための副次的役割であると規定する。そして芸術の役割限界を認識し、過重評価せずに活動することを訴えている。

林と鹿地の主張を見てみると、鹿地論文には、文芸を政治の下位に置き、文芸の役割を限定するという言説が、林論文には、芸術の有用性の観点から、文芸運動がこれまで同様独自の活動し、運動に貢献し得るといふ言説が見て取れる。この段階で、文化運動の確立のため活動してきた先達たる人々と、後発的に運動に加入してきた理論先行の人々との間に明確な見解の相違があることがわかるだろう。

両者のすれ違いの発生の背景にはさらに、旧来からの労働者出身・労働者寄りの文芸者と、マル芸系の学生・演劇人を中心とした若い世代の間の心情的対立が根本にあったという部分も見逃せない。前者には、「資本主義の没落」といった空疎な言葉に一喜一憂し、革命近しと騒ぎ立て、労働者に近づこうとせぬ若者に対する反発が、後者にはロシアの革命理論と福本理論が運動に浸透している状況に対する無理

解や労働者的な親方面に対する反発があった。

二七年六月の『改造』に「プロレタリア文芸理論の確立へ」という特集が掲載された。当時労芸残留組だった蔵原惟人はこの特集に「所謂プロレタリア文芸運動の「混乱」について」⁽⁴²⁾という文章を寄せている。その中で蔵原は、文芸運動の唯一の目的である無産階級解放のために、「芸術が如何なる役割を果し得るか、乃至は芸術を如何にして役立たして行くか、と云ふことのみが我々の終局の問題たり得る。そして我々は現在に於けるこの文芸運動の役割を、全被圧階級の無産階級解放の為の闘争の啓蒙及びアジテーションとして見るのである。」と述べ、芸術の有用性をアジプロ方面に明確に指向することを表明し、啓蒙・宣伝的作品のみを良い作品とする、とまで言い切っている。この点は既知の目標の再明示であるが、続けて蔵原は、観念的左翼は、文芸運動を狭義の政治的行動に局限してしまい、ブルジョア文壇への進出や文壇との対立までも否定する観念性はむしろ逆に反動的役割を果たすと述べ、さらに観念的左翼は具体的問題に対する回答を、現段階の抽象的真理の論理的結論にのみ求める傾向があると批判する。ここで言う観念的左翼とは、プロ芸の福本主義者のことであろう。

これに対し『プロレタリア芸術』二七年七月号の谷一「没落者をして没落せしめよ」⁽⁴³⁾では、先の蔵原論文が「芸術が如何なる役割を果し得るか、乃至は芸術を如何にして役立たして行くか、と云ふことのみが我々の終局の問題たり得る。」と述べる点に「今迄通りの文芸運動を続けて行つてよい」といふ意思表示があるとする。そして「芸術批判が、政治的批判に転換化するや、プロレタリア芸術運動はその部分的性質を揚期して、全体性的なる性質を獲得するに至る。茲に、方向転換の弁証法的性質が存在してゐる。」という前提の下、政治批判に

まで発展しない限り、プロレタリア芸術運動は、全運動の一翼として位置づけられ得ないが故に、そうした過程を経ず闘争目標を前提条件としてしまう行為は、必然的に芸術批判を芸術批判のままに止め、結果的に「芸術至上主義」への道を開くことに他ならないとしている。

要するに、政治批判への方向転換という過程を経ることが、全無産階級政治闘争の時代においては、不可欠な条件であるにも関わらず、それを理解しようとせず、現段階の社会に適応しない古い公式にしがみつき、「正しい」理論闘争を乗り越えたプロ芸員を「観念的左翼」と批判する労芸一派は、芸術至上主義という反動ブルジョアと同じ害悪を運動に与え、運動を阻害することに繋がるため、労芸を排除するべく闘争せねばならない、というのがこの谷論文の趣旨であろう。

蔵原と谷の論文は、結局「どちらがより反動か」という議論に終始しており、レットテルの貼り合いではない。こうした論戦は、二十七年一月の『文芸戦線』に掲載された労芸の公式声明⁽⁴⁴⁾で、労芸がプロ芸に対し勝利宣言を出すような状態にまで至る。

また、この公式声明中では、分裂に際し極左ブロックの働きかけがあったと述べられている。当時『無産者新聞』編集部にいた党員の門屋博は後年、同じく編集部所属の党員是枝恭二がプロ文芸運動の分裂の仕事を門屋に依頼、断った門屋に是枝は「政治局の指令」と述べ、最終的には是枝自身が乗り出していったとの回想を残している⁽⁴⁵⁾。

分裂当時、党は福本主義に基づく再建を果たした後で、福本自身も政治局に所属していた。しかしながら、後述するように福本を始め党中央委員の大半がこの時、コミンテルンから党綱領の承認を得るため、モスクワに行っており、二十七年二月まで党主導で新規の行動を主導することが出来ない状態にあった。そのため党が文化運動へ介入した

と考えるのはこの場合不適當だろう。

二十七年五月の『新潮』の青野季吉「マルクス主義文芸説について」では、「党派性」について、

共産党に従属すると言った風に解しても、現在の日本のマルクス主義文芸運動には、決してそんなことは無い。現在の日本には文芸運動をその下に従へるとき共産党が存在しないからである。またもしそのとき共産党が存在したとしても、それにまで「成熟」した文芸運動の中心がないからである。しかしマルクス主義の理論から言つて、もし十分に信頼をもつた共産党が存在し、十分な中心を持つた文芸運動が存在すれば、その文芸運動の中心が党に従属するのは当然である⁽⁴⁶⁾。

と述べられており、このことから、労芸が、当時の運動と党の関係をどう捉えていたかがわかる。社会主義者グループ体に過ぎなかった第一次共産党と再建ビューロー期の党しか知らない青野は、日本には確固たる共産党はなく、文芸運動は、未だ仰ぐべき指導集団を持っていないと認識していた。そして文芸運動自体も未だ発展の途上であり、運動の一翼たる力を身につけるためにまだ研鑽が必要という考えから、空疎な運動発展の機運と、思想理論の確立に踊る人々は、党運動の闘士ではなく、単なる「宗派主義者」に過ぎないという見方をするのは実に自然なことである。しかし、この論理は共産党の存在の明確化によって即座に転換し得る危うさも秘めていた。

第二節 二十七年テーゼの到来と文化運動団体の再合同

二十七年一月、労芸で再び組織分裂が発生した。労芸を脱退した蔵原惟人・佐々木孝丸・山田清三郎・林房雄らは前衛芸術家聯盟（前

芸」を結成し、翌年一月に雑誌『前衛』を機関誌として創刊した。分裂の契機は『文芸戦線』二七年一〇月号に掲載された二七年テーゼの訳文「コミンテルンに於ける日本無産階級運動の批判」（訳者蔵原惟人）に始まる。先にも少し触れたが、二七年二月に福本を始めとする日本共産党指導部はモスクワに呼ばれ、再建大会で定められた綱領に関する長期間の討議が行われた。そこで、福本主義はコミンテルン指導部から徹底した批判を受け、プーリニン起草による新テーゼが指導方針として与えられることになった。これが二七年テーゼである。

ここでこのテーゼ訳文の公開状況を整理してみる。テーゼ本文の決議が二七年七月一五日である。そしてソ連共産党の機関誌『プラウダ』にテーゼの梗概が記事として掲載されるのが八月一九日になる。

『文芸戦線』に載った蔵原の訳文はこのプラウダ記事の訳となる。ちなみにテーゼ本文が掲載された雑誌『インプレコール』が日本に到達し、それを元にした訳文が出るのは二八年二月、掲載誌は中間派無産政党であった日本労働党寄りの雑誌『社会思想』である。⁴⁷『マルクス主義』誌上にテーゼが載るのは二八年三月のことで、党運動に近い人間からテーゼに関する発言はこれ以降になるまでは見られない。

蔵原訳文に反応する形で書かれた『マルクス主義』誌上の最初の文章は二八年一月号の渡辺政之輔「一般戦略の決定的重要点について」である。その文中では「全世界の労働階級の前に最も権威あるコミンテルンが何事を決定したか、今私の直接関するところではない。⁴⁸」という留保を付けた上で、山川均に近い雑誌『労農』（二七年一月二月初刊）の面々が訳文を元に一方的な主張をしていることを批判し、コミンテルン決定はそれを受け取った人々の手で正しい形で明らかにされるだろうと述べている。渡辺は中央委員としてモスクワに行き、

二七年テーゼの作成に立ち会い、それを持ち帰った一人である。故にコミンテルンの決定を知っている人間である。にも関わらず、『マルクス主義』にテーゼ全文訳が出るまで、党関係者は沈黙状態を続ける。

二七年一二月号の『文芸戦線』に二七年テーゼ等に関する山川均の文章⁴⁹「或る同志への書翰」が掲載されるが、山川自身の追記によると、文中に「『無産者新聞』に現はれた神聖不可侵な極左宗派主義者の態度に対する無遠慮な批判―この『絶対権力』に対する冒涇―の言葉があつた」とのことで、掲載を拒否する動きが起こり、一月号掲載予定が保留となったとのことである。問題になった山川の批判は、二七年の普選法による最初の地方選挙総括に関する無産者新聞の記述が、無産政党の既成政党への勝利を謳うものではなく、労働党の社会民衆党・日労党に対する勝利の凱歌になっていることに対して、無新の階級的良心を問い、ひいては「自称マルキスト」の狭隘な指導精神を批判するものであった。

この『無産者新聞』批判及び、同紙がほぼ機関紙的役割を果し、同紙にとつては唯一の階級政党である労働党の勝利を過小評価する（とみなされた）山川の文章に対して、同紙を支持することが階級的良心と信じて疑わない人々や、山川の持論である共同戦線党論の観点から、無産政党右派・中間派への擁護、ひいては階級政党である労働党の解消にまで発展するのではないかという危惧を抱いた人々、そして何よりも、プロレタリア文芸運動の局面にこうした山川の思想を持ち込み、それが指導理論となることを許容できない人々の意識が、労芸脱退・前芸結成という事態を齎したというのが分裂の経緯である。

またテーゼ訳文掲載後の党関係メディアの沈黙状態が、山川に近い人間による一方的な福本批判（二七年テーゼでは解党派的傾向として

山川も批判されているにも関わらず）に拍車をかけ、党関係者が自分達に都合の悪い批判をもみ消したとする非難まで飛び出していた。⁽⁵⁰⁾こうした山川系の人々のある種行き過ぎた攻撃もまた、福本主義的ではないが故に労芸に留まっていた人々に分裂のきっかけを齎した。

前述した二七年一月号の『文芸戦線』の公式声明は、この事態も踏まえて出されたもので、プロ芸分裂後も労芸の「プロレタリア芸術聯盟の小ブルジョア分子」が演劇部を中心に活動し、背後にある「極左的ブロック」の政策から、分裂という事態に至ったとしている。そして、プロ芸と今回の脱退組は共に「宗派的分裂主義者」であり、合同せざるを得なくなるだろうとした上で、こうした状況を極左の最後の足掻きと認識した上で、労芸の勝利宣言を出しているのである。

『前衛』二八年一月創刊号の蔵原惟人「無産階級芸術運動の新段階」⁽⁵²⁾では、これまでの芸術団体の分裂を「発展段階にあってやむをえない現象」とし、一二月分裂を最後に、統一戦線構築に向かう必要性からプロ芸に対する批判が展開された。

この文章で蔵原は、民衆に「特殊性に拘らない」プロレタリア芸術を持ち込むプロ芸の方針は、実際には特殊性の無視であると述べ、大衆に理解され、愛され、大衆の感情と意志とを結合し高める芸術の必要性という観点から、「一般的規定からの論理的結論としての大衆——かくあるべきの大衆」でなく、「生きた大衆」を描くことを訴えた。

次いで、ブルジョア芸術との闘争前にブルジョア社会の徹底的揚棄を訴えるようなプロ芸の路線を廃し、ブルジョア芸術との闘争を理論的克服とマルクス主義的批評によって遂行すると共に、小ブルジョア芸術家の持つ動揺性を捉え、運動の「随伴者」として利用する努力を訴え、優れたプロレタリア作品によるブルジョア芸術の凌駕を説いた。

論文全体の特徴としては、自分たちが直前まで所属していた労芸に対するコメントが一切なく、プロ芸への批判が大半を占めていることと、統一戦線の構築という、二六年のプロ芸結成以後放棄された路線を客観情勢に合わせて再び提示しつつ、議論を進めていることが挙げられる。二七年テーゼをめぐる問題で労芸を出てきた蔵原ら前芸は、福本主義否定が運動のコンセンサスとなったことを十分理解しているから、福本主義者たちに、その観念の鎧を脱ぎ去るための理論的提示を行い、論争を通じて二七年テーゼを前提とした芸術団体の統一を呼びかけるためのいわば「撒き餌」として発表した論文であると、この蔵原論文を解釈してよいのではないだろうか。⁽⁵³⁾

また、論文内の「同伴者」理論（当時ソ連で主流だったルナチャルスキーの同伴者作家論の影響）や、「大衆に理解され、愛され、大衆の感情と意志とを結合し高める芸術」というクララ・ツェトキン『レーニンの思い出』からの引用など、ソ連帰りの文芸評論家色が随所に感じられる。こうした新しい理論引用を元にした文章が、文化運動関係者に衝撃を与え、運動内での蔵原の地位を押し上げていった。⁽⁵⁴⁾

蔵原論文を組織合同のための「撒き餌」と表現したが、前芸成立後の二七年一二月に無産者新聞社の門屋博が仲介する形で、両組織の合同に関する協議会が開かれ、翌年四月まで数回の会合が持たれた。この協議会に積極性を見せたのはプロ芸の方で、機関誌『プロレタリア芸術』にも毎号巻末に交渉の過程が掲載されるほど、合同交渉の成り行きが注視されていた。一方前芸の機関誌には、第二回以降の協議会が前芸本部で行われているにも関わらず、交渉の経過を示す記述はこの時期全く見当たらない（門屋博の合同促進アピール文は一二月の両機関誌に掲載されたが）。交渉の場でも前芸はプロ芸の「理論的清

算」を強く求め、交渉の停滞・協議会の空洞化を招くことになった。

前芸が合同交渉でこのような態度に終始した理由として、まず前芸側の注目が、プロ芸との組織合同ではなく、蔵原が提唱していた「日本左翼文芸家総連合」(二八年三月二三日結成)⁽³⁶⁾の準備の方であったことが挙げられる。前芸プロ芸の両者は勿論、アナキスト系団体にまで対象を広げ(労芸にも呼び掛けは行いが不参加)、組織としての合同でなく、連合という急激な変化を齎さない運営形態での活動は、結成直後の組織である前芸がイニシアティブをとって行うものとしては、プロ芸との組織合同より魅力的で、現実的だったのだろう。

もう一つの理由としては、この時の前芸はプロ芸と違い組織合同を焦る理由がないということが挙げられる。先に少し触れたように、二七年テーゼを支持する形で労芸から独立した前芸と、同じく二七年テーゼの支持自体に関しては異論のないプロ芸が合同を行うに当たり、譲歩をすべきなのは二七年テーゼで批判された福本主義を軸に据えていたプロ芸の方であり、プロ芸の側が分裂前の前芸に投げかけていた批判である「意識的折衷主義の打破」を労芸からの分裂によって成し遂げた前芸にとっては理論的に譲歩する必要はないのである。また両組織にとつての差し当たった問題が第一回普選の労農党支援くらいのものであり、実践面からみても合同を急ぐ理由は存在しない。こうした状況下でプロ芸側の理論的清算というカードを提示しつつ交渉を優位に展開するという思惑も容易に想像出来るものである。

また、この合同交渉に関して、門屋博が仲介を行ったことはこの時期の文化運動における権威の問題を考える上でも重要である。前芸側の川口浩は後年、門屋が「新人会の先輩であるうえに、なによりもまず党の旨を受けて乗り出してきているかに推察されたのである(実際

そうだったかどうかは知らぬが)」と述べ、プロ芸側の谷一も、門屋から合同斡旋の連絡を受けた際、「その連絡の中では、党という言葉は出なかつたようですが、私たちはそれを門屋君個人の意見としてではなく、前衛党の方針であることを感じ」ていたと後年述べている。

ここで問題となるのは両組織の関係者が共に「党の存在を感じて」行動しているということである。先に『無産者新聞』に対して党の姿を錯覚している文化運動関係者の姿について述べたが、ここでもまた、組織合同という文化運動の一大変革に対し、関係者が党の存在を意識して、自発的に行動している様が見えるのである。とはいえ、この時点では党の存在を感じ取ったにせよ、前芸側は交渉の速度を速めることなく、自らのベースに持ち込んで行動している。つまり、前衛党の権威が文化運動団体の行動を完全に縛るような状態ではまだないということが言える。こういった点から見ても、運動権威がそれを受け入れる側の自発的行動によって作られたものであり、決して上部組織から強要されたものではないということが伺える。

以上述べてきたように一九二八年初頭、プロレタリア芸術家団体は三分立状態で、それぞれが独自に第一回普選における無産政党的闘争支援や文芸活動を展開していた。労芸を除く二団体には合同の動きも見られていたが、解決には時間が必要に見えた。こうした中起こった運動面での一大事件が、文芸団体の急速な再編を齎していった。

第三章 文化運動組織の発展と権威構造の形成

第一節 ナップの誕生・発展と党運動への視線

一九二八年三月一五日に、全国で共産党員の一斉検挙が行われた

(三・一五事件)。それに次いで四月一〇日には労働農民党・無産者新聞社・全日本無産青年同盟(合法無産青年団体)に解散命令が出され、共産党主導の社会運動は大きな転換点を迎えることになった。

三・一五事件では、文化団体関係者から検挙者が出ることはなかったが、大々的な運動弾圧に対し、文化運動の面でも、統一された強力な組織体で運動を展開し、弾圧に抗していく必要が生まれた。そこでとり急いで前芸とプロ芸の合同が果されることになり、三月二十五日、全日本無産者芸術聯盟(ナツプ)が結成され、その翌月、ナツプの機関誌として雑誌『戦旗』が創刊され、文芸運動の拠点が形作られた。

急速な合同をなしたプロ芸と前芸であるが、依然理論的相違は残存していた。両組織のこうした相違が論争を通じて提起され、討議を通じてナツプとしての運動のあり方がいわば「弁証法的に」決定されていく契機になったのが、『戦旗』創刊当初から展開された「芸術大衆化論争」である。その萌芽的なのは両組織の合同前に既に両組織の機関誌で見られ始めていたが、本格的な論争は『戦旗』二八年六月号から一二月号まで、主に蔵原惟人(旧前芸)と中野重治(旧プロ芸)の二人を軸に展開された。⁽⁶¹⁾

この論争は、最終的に「われわれの知りえたものはわれわれの誤謬である」という総括から、決定事項としては「プロレタリア芸術を本来的なそれと、大衆的なそれに分けることは誤り」「グラフィ誌『無産者グラフィ』の発刊」に止まるといふように、一時的な手打ちと問題の先送りという結末に終わってしまう。一応の成果を挙げるとすれば、旧プロ芸と旧前芸のそれぞれの指導理論とそれに基づく活動の果てに得られた運動観の暴露及び、論争を通じての、同じ党・同じテーゼを受け入れた人々による意見の刷り合わせを通じた、急速な合同の後始

末の終結を齎したことが成果と呼べるものではなからうか。

つまり、三・一五事件がなければ両組織間で合同前に行われていたであろう論争のための不可避的な期間及び論争過程こそが「大衆化論争」⁽⁶²⁾であり、それによりナツプは二八年一月によるやく統一された意思と組織を持つ合同組織としての体裁を獲得したと考えられるのである。とはいえ、この過程で先送りされた大衆化の問題は以後数度にわたり浮上し、ナツプ内部で論争を巻き起こしていくことになる。

翌一九二九(昭和四)年は文化運動にとって前年の大衆化論争を経た上での実践段階への移行と、それを通しての問題点の洗い出しによる適宜補強の年と言っても過言ではないだろう。

一月から二月にかけて、前述したナツプ内部の部門別組織化を実行に移すべく、プロレタリア作家同盟(ナルプ)、プロレタリア映画同盟(プロキノ)、プロレタリア演劇同盟(プロット)、プロレタリア美術家同盟(ヤツプ)が作られ、四月には音楽同盟及び、ナツプ内部局として「戦旗社」が設立され、ナツプは上記団体の協議会的組織として改組された。こうした動きと前後して大衆に対しその存在感をアピールする作品群にも徐々に恵まれ出してきた。

『戦旗』二八年一月・二月号の「一九二八年三月十五日」、次いで二九年五月・六月号の「蟹工船」で本格的に左翼文壇に登場した小林多喜二の存在はその大きな一例である。その他、三月号の中野重治「鉄の話」、六月から一二月にかけて連載された徳永直「太陽のない街」など、ナツプ作家が一躍時代の寵児となり、プロレタリア文芸全体を活気付けると共に、『戦旗』の発行部数増加にも拍車をかけた。同時に、新たな試みとして五月号から別冊付録の形で児童向け雑誌『少年戦旗』が発刊されるなど、活動の多様性を見せ始めていった。

特に『少年戦旗』は、同年九月から独立雑誌になり、二八年一〇月に結成された新興童話作家聯盟の構成員榎本楠郎や、ナツプ員猪野省三らを中心に、多様な読物で構成された誌面によって、ターゲットとされた子供達だけでなく、農村青年などにも読まれる雑誌となり、遂には全国農民組合の少年部運動の中心教材として正式に位置付けられるまでになっていった、大衆向けアジプロ誌の一つの成功例である。⁽⁶³⁾

こうした成功の影でナツプ自体としては、現実の党が弾圧で実態を掴めなくなっている中、運動の進展という客観的状況に対応した文芸運動の確立を独自にやらなければならない状態にあった。

二九年中は文化運動に関する論文が激減し、七月から翌年三月までは一本も『戦旗』への掲載はない状態になる。だが、少ない中にも問題洗い出し過程と、運動権威の問題が含まれる論文が存在する。自身を文芸運動の拠り所として確立する意味においても、先送りにされた大衆化の問題に対する意見や、その他活動の具体的提言となるこうした論文を通して、運動の理論的・実践的深化が試みられていった。

その一例としてまず中野重治「われわれは前進しやう」(『戦旗』二九年四月号)を挙げる。中野は、三・一五事件以後を振り返り、

この一年間わがプロレタリア×(党―引用者註)は、敗北の教へるすべての教訓を引き出し吸ひ上げて来た。この一年間わがプロレタリア×は、最も困難な事情の下で最も大胆に計画し、それを更に大胆に実行して来た。今や追求も死刑法も×を弱めることは出来ない。白色テロルもデマゴギーも、×に対する大衆の信頼、大衆に対する×の政治的・思想的影響を弱めることは出来ない。⁽⁶⁴⁾ ×はますます強くなる。×の大衆に対する影響はますます大きくなる。

と述べた。ここで重要なのは、党の存在・活動と大衆とが信頼と影響という観念的な関係で示されているように、極めて抽象的な文言によって強調されていることである。具体的な闘争の姿ではなく、いかにも煽動的な文言を並べ立てるといふのは、党主導下でなされた運動実績が三・一五以後列挙できないという状況もあるが、この場合あえて抽象的な煽動文にすることで、党が見えないが故の効果的な見せ方として作用させようとする意図があるのではなからうか。

続けて中野は、こうした状況下での芸術の役目について、

「芸術の役目は労働者農民に対する×の思想的・政治的影響の確保・拡大にある。即ち、労働者農民に××(共産―引用者註)主義を宣伝し×のスローガンを大衆のスローガンとするための広汎な×(煽―引用者註)動宣伝にある。」

従って芸術の内容も、「プロレタリアートの姿」とか「権力に対する闘争」とかいふボンヤリしたものであり得ない。それは正に×の掲げて居るスローガンの思想、そのスローガンに結びつくところの感情である。

勿論我々是我々の芸術の内容をなす思想感情の数が×のスローガンの数と同じといふのでなく、芸術として現れる時それが×のスローガンそのまゝになるといふのでなく、また×のスローガンを中心にして芸術を製造しろといふのではない。我々の芸術の内容は我々の階級的必要であり、×の掲げて居るスローガンこそこの階級的必要の政治的・集約的・徹底的表現に外ならぬと言ふのだ。⁽⁶⁵⁾と述べた。ここで重要なのは「党のスローガン」を重要視するところである。党のスローガンを大衆に拡大して行くということは、党及び党活動の姿を大衆の眼に曝すということであり、それが「階級的必

要」であると言いつつ切られている。ここには見えない党の見せ方のさらなる発展形が意図されているということなのである。そしてそれを文化運動関係者が自発的に選択し、自ら党を可視化する為に行動することを求めるものだということが極めて大きな点であると言えよう。

この論文が書かれたのは四・一六事件前で、三・一五の検挙を逃れた佐野学や鍋山貞親らが党中央の再建運動を進めていた時期である。文化運動の側がこの件に関し正確な情報を持ち得ていたかは不明だが、党よりもいち早く組織を立て直し、安定的な運動を開始した文化運動が、党とその活動を自発的に強調することで、見えない党の可視化を図っていく動きの一つの形としてこの論文を位置付けてよいだろう。

もう一例は、『戦旗』一九三〇（昭和五）年四月号の蔵原惟人（佐藤耕一名義）「ナツプ芸術家の新しい任務」である。

この論文で蔵原は、これまでのナツプの成功を述べながらも、「労働者・農民の革命的な成長から取り残され」る危険性を指摘し、「大衆に根差す」段階から進み、「共産主義的芸術」の観点へ向かう方法として、

我々の芸術家が、わが国のプロレタリアートとその×（党―引用者註）とが現在に於いて当面してある課題を、自らの芸術的活動の課題とすることによつて可能である。ちやうどソヴェートのプロレタリアートとその党とが、産業と生活との社会主義的改造をその課題としてある現在に於いて、かの国のプロレタリア芸術家の全注意がやはりそれに向けられているやうに、戦闘的プロレタリアートが大衆闘争の先頭に立つてする×の拡大・強化を中心的課題としてある現代の日本に於いては、プロレタリア作家・芸術家の全関心も亦この線にそつて進んで行かなければならない。か

うして初めて我々は、漠然とした「プロレタリア芸術家」としては、真実のポリシエヴィキ的××（共産―引用者註）主義的芸術家となるのが出来るのだ。⁽⁶⁶⁾

というように、先の中野論文と同じく、「プロレタリアとその党が直面する課題を自分のものとする」ことを促す。そしてその背景として当時進行中だったソ連の五ヶ年計画と、それに沿って進むソ連の作家の姿を援用しているのが特徴的である。次いで、「題材」の問題に話を移し、描くべき物を前衛の活動に限定するものではないとしつつも、

しかし若しも彼が××（共産―引用者註）主義者であるならば、第一に彼はプロレタリアートとその×の必要から全然かけ離れた題材を取扱ふことは出来ないであらうし、第二に彼はあらゆる問題をその時代におけるプロレタリアートの××（革命―引用者註）的課題と結びつける所の「前衛の観点」をもつてその題材に向ふであらう。⁽⁶⁷⁾

と述べている。ここにおいて「共産主義者」なら、どんな題材でも「前衛の観点」で描くに違いないという断定にまで到達しているのは重要である。蔵原の中で「模範的共産主義者」像が明確に形成されていることは明らかだが、はたしてそれを他の作家、あるいは文化運動に近い人間に要求出来るかに関しては疑問符を付けざるを得ない。

中野・蔵原の両論文が、ここまで原則主義的な前提性を維持した高水準の要求を課するような提唱を行うに至った背景としては、運動の成熟・資本主義没落期の到来・社会主義の発展というような観測に基づいた文化運動の立ち遅れ感が意識されるようになったことが挙げられる。二九年以降の世界恐慌と、同時に進行していたソ連の五ヶ年計画による発展を文化運動関係者が認識することで、そうした意識が醸成され

ていたのであろう。その意識は同時に、「大衆はプロレタリア的に進んでいる」という意識につながり、それ故にそれまでのような大衆への過度な迎合はもはや必要ないという認識にまで立ち至った結果、原則論的な主張が生まれて来たのではないだろうか。

そして、「党を支持」という段階から、「党の課題を自己の課題に」という一歩を踏み出すことを文化運動に要求するという意識的飛躍は、党という存在を目視するために文化運動の側が歩みを見せたことの証として、文化運動と党の関係上大きな変化であるとも言える。

このことは、中野・蔵原の両論文が、レーニンの「文学は党の文学にならねばならない」という言葉を引用していることから伺える。この言葉自体は一九〇七年のもので、非合法状態にあったロシアの党出版状況に対し、合法面からの運動高揚のため文学を利用するという観点から生まれたものである。しかし、この時期のプロレタリア作家がこの言葉を、前後の文脈から切り離して単独で使用するところに、党という存在への接近意識の強まりを見ることが出来る。

三・一五事件以降と以前とでの大きな違いの一つに、党が存在するという明確な認識の共有度の違いが挙げられる。二四年に解党した第一次共産党と、二六年再建前のビューロー、この両組織の存在を明確に認識し、党運動が日本に存在していることを認知し得た人間は、社会運動者の中でも少数だと言ってよいだろう。しかし、二七年テーゼを受け、翌年の総選挙闘争に際し、共産党は公然化して活動した。その直後起こった三・一五事件は直後の規制期間の後、大々的に報道されることで、運動に近い人間だけでなく、多くの大衆が日本に共産党が存在するをはっきりと認識し得るに至った。そして、運動に近い人間は党運動が事件後もその命脈を繋いでいることを認識するこ

とが可能であった。つまり、権威として立ち現れる党は概念上の前衛党ではなく、日本共産党という明確な存在になったのである。

このように党の存在・存続を明確に意識できるという前提の下で、党の課す要求に答えようと言う意識、地下潜行的活動を余儀なくされている党の存在を「見える」ような働きかけを行おうと言う意識が芽生え、知的生産活動に従事する文化運動関係者はより先鋭的に、より積極的に「存在する」党の側に歩みを進めていったのである。

第二節 党運動と文化運動の接触

二九年の四・一六事件で再び指導部を失った党は同年七月再建された。田中清玄・佐野博らを中心としたこの指導部（所謂武装共産党）の時期は、文化運動と党運動の関係に変化が訪れた時期である。

まず大きな変化として、文化運動中軸関係者から初めて党員が生まれたということが挙げられる。田中・佐野指導部がこれまでの党指導部と大きく異なる点は、資金面で苦境に立たされたことである。三・一五事件以前は二五年に開設されたソ連大使館を介し、通商部代表の肩書で来日していたコミンテルン代表のヤンソンを通じて資金提供や郵便物の送付などが行われていた。四・一六事件後、コミンテルンとの直接のチャンネルが切れ、上海のコミンテルン極東ビューローを通じる形となったため、以前のように頻繁なやり取りを行うことは出来ず、まとまった援助を受けられなくなった。⁽⁶⁹⁾

そこで田中・佐野指導部は資金確保・党勢拡大のため新しい形を模索して行く。党組織の中に「技術部」（テク）という組織防衛等のための部局を新設し、その下に「金策係」という資金調達部門を設けたのも、資金調達活動の一環である。⁽⁷⁰⁾

それ以前の話になるが、四・一六事件の前に、党再建活動を展開していた市川正一・三田村四郎らの党幹部は、再建活動の一環として二九年一月から地方調査を行っていた。その活動を通して、

党組織ノ第一段階トシテ各地方ノ組合運動ノ情勢、政治的傾向及重要活動分子ヲ調査シ、直接之等ニ会见シテ党ノ宣伝ヲ行ヒ且労働者ニ対シテハ即時入党ヲ勧誘シ、又近キ将来黨員タリ得ル人物及党組織ノ可能ナル地方ニ於テハ地方責任者タリ得ル人物並ニ「エーゼント」(黨員ニ非ザルモ党ノ影響下ニ在ツテ宣伝煽動等ノ運動ヲ為ス者)「シンパサイザー」(党ノ同伴者)トシテ党ニ接近シ得ル人物ニ目星ヲ付ケ以テ党再組織ノ素地ヲ作り同時ニ「赤旗」ノ配布方法及秘密通信先(アドレス)ノ打合ヲ命ジタリ⁽⁷¹⁾ というように、非黨員活動家「エーゼント」と同伴者「シンパサイザー」の発掘と把握が試みられていた。

田中・佐野指導部は、党再建に当たって、エーゼント分子の入党とシンパサイザーへの協力を求めていくことになる⁽⁷²⁾。その一環として、田中清玄自身が文化人への接近を試みていく。

二九年六月、プロレタリア作家(ナツプ員)片岡鉄平宅で蔵原惟人は田中と面識を得、八月に入り蔵原は田中と街頭で会った際、文化団体内からの資金提供を求められ、以後蔵原と同じ国際文化研究所員小川信一(大河内信威)と協力してプロレタリア文化人からの資金を取りまとめ、田中や連絡員に渡している。さらに九月に蔵原は入党決定の旨を伝えられ、以後黨員として地下潜行しつつ活動し、三〇年六月には田中の依頼でプロフィンテルン第五回大会の通訳としてソ連に行き、日本を一時離れるなど党活動の重要な要素を担っていく。

その他にも田中は立野信之らと秘密裡に会い、文化団体の話を聞いて

たりするなど文化人と接触していたようである。以上のことからわかるのは、少なくとも田中清玄はシンパサイザーとしての文化人に高い関心を持っていたことと、文化人からの資金提供を取りまとめる仕事すなわち文化運動と党との接点として蔵原を選び、彼に同伴者としての文化人の活動を委任したということである。

ここで疑問となるのは、蔵原が何故この仕事を任されたのかということである。前述のように、資金提供は蔵原と小川信一が主導していた。小川は蔵原と同じく国際文化研究所員(後プロレタリア科学研究所の中央メンバー)であり、共に著名な父を持つ、出自のはっきりした存在である(蔵原の父は衆議院議員蔵原惟郭・小川の父は理科学研究所所長大河内正敏)。共通項の多い二人の内、蔵原が文化人の取りまとめを任せられ、黨員にまでなっているのは、蔵原が「模範的共産主義者」として確立されていたからだろう。これに関しては後述する。

田中・佐野指導部はその後、三〇年のメーデーで武装デモを行なうなど、「極左冒険主義」に走った結果、組合運動で全協刷新同盟という反対派を生むなどの混乱を招き、三〇年七月に指導部検挙により壊滅状態となる。

指導部壊滅後、日本労働組合全国協議会(全協)の構成員による組織再建運動が三〇年九月末から年末にかけて起こるが、この時期、文化運動への働きかけがあったとナツプ員手塚英孝は後年語っている。

この活動に関し、手塚を含むこの時期の運動を語っているプロレタリア演劇同盟(プロット)員生江健次の供述と合わせて見てみる。

生江の供述⁽⁷⁵⁾によると、三〇年上半年期の段階で運動との関係を一時絶っていた生江が運動を再開し、三〇年七月に新たな連絡員として紹介されたのが、「井上」という男であった。生江と井上の活動実態は、

一〇月から二月まで街頭で会い、生江が所属していた左翼劇場など芸術団体の動向を井上に知らせる程度だったようである。生江はその後、左翼劇場のメンバーを井上に紹介し、「我々ノ方ノ統制下ニ置き、会合を行っていたという（生江が手塚を井上に紹介したのは九月）。そして井上との連絡が切れたのは一二月であるとのことである。

しかしながら、生江はこの段階では黨員でなく（入党は三一年一月）、黨員から紹介された人材を窓口に、「エーゼント」間の合議による「フラクション」的なものを左翼劇場中心に形成し、それにより左翼劇場内での主導権獲得を企図していたに過ぎない。生江は、後に自らが入党させた手塚英孝以外の人間（井上他の人々）に関しては、「日本共産黨員テアルト信シテ共ニ行動ヲシテ来タ」と供述している。

次いで手塚の回想だが、手塚は三〇年八月下旬〜三一年一月までの間、神吉洋士（かみきひろし）という人間が文化運動に党グループを作る働きかけをしていたと後年語っている。そして手塚が神吉に会ったのは一〇月から四、五度だとのことである。

手塚と生江の回想を刷り合わせると、生江調書に出てくる「井上」が神吉である可能性が極めて高いと思われる。そして、神吉が文化運動に党グループを作る活動をしていたという手塚の回想は、生江の紹介で神吉の下に「位置付けられた」左翼劇場などの「エーゼント」によるフラクション活動を、神吉が主導した左翼劇場内党グループだと手塚が錯覚した結果生まれた証言であると考えるのが自然だろう。

この一件から、エーゼントやシンパサイザーに対する黨員の接触・街頭連絡という二九年以降の党運動の形態が、中央組織の壊滅という状態になっても、末端部においては引き続き、連絡網の再生産が維持されていたことがわかる。そしてこの連絡網の中にあるエーゼント員

の会合・合議体という、三一年以降の文化運動新方針の軸となる機関の萌芽的なものが文化運動の局面で、文化運動関係者により自発的に形成され始めていたことがわかる。

武装メーデー事件と同じ月の三〇年五月に、作家同盟構成員の多くが党への資金提供の疑いで検挙されている（共産党シンパ事件）。この事件もまた、当時の文化人、とりわけ検挙の対象になった人々に逆説的にはあるが、共産党の再建の事実と存在の確かさをさらに認識させる契機であった可能性は否定出来ない。

事実「シンパ」とは、村山知義の言葉を借りれば、「資金と『赤旗』読者のグループ」を指すものであり、党としてのシンパサイザーの定義は前述の通りである。党の活動方針などを認識する機会は存在したのである。そういう形で党に触れていた人に加え、資金提供だけしていた人にとっても、（三・一五すら免れた）自らが検挙の対象になったという事実を突きつけられたことは、自分の近くに「党」があるということに自覚し得るに至る画期的な出来事であると言えよう。

第三節 党権威の拡大と文化運動における顕在化

一九三〇年の文化運動に起こった大きな事件の一つに、「戦旗社」のナツプからの独立が挙げられる。

前述のように、二九年一月のナツプ組織再編に伴い、機関誌編集部をナツプ内部局・出版社の形態にしたのが「戦旗社」である。以後同社はナツプ員から選ばれた編集委員による編集会議の方針に沿った出版活動を行うと共に、『戦旗』の直接配布網を作り上げていった。

その戦旗社は、三〇年一〇月、ナツプから独立することになるが、この独立によって、戦旗社が「党のアジプロ部」の下に位置付けられ

たとするものが研究史上一般的となっている。この点に関して、当事者の回想などを整理してみたい。

ナツプの中央委員だった鹿地亘が語る⁽⁷⁸⁾ところによれば、事の発端は三〇年五、六月に戦旗社組織部にいた作家上野壯夫が鹿地を訪ねて来たことから始まる。

上野は鹿地に、「上部の意見」として戦旗が大衆雑誌・政治的啓蒙雑誌になっている以上、編集を作家や芸術家に任せておけず、非合法の編集会議が常態化している状況を説明し、鹿地にその責任者になることを求めた。鹿地はナツプで決めるべきことだと反論したが、上野は、戦旗社の意見は決定しており、「ナツプからの脱退」を仄めかしながら「そんなごたごたがおこらないように、君からうまくみんなを説得してもらいたい」と語り、鹿地にナツプ側の説得を要求した。

その後鹿地はナツプの中央協議会を開くも、戦旗社代表はこれをボイコットし、逆に戦旗社側の主導する会議に鹿地が出席を要求された。その会議は実態としては鹿地の「査問会」のようなもので、出席者による批判を受けた鹿地はそれに屈する形で「全体運動の要請」に忠誠を誓うことになった。

それと同時に『第二無産者新聞』に鹿地をスパイとする記事が掲載され、鹿地・山田清三郎・川口浩は責任を取る形でナツプ・作家同盟の職を辞した。こうして鹿地らがいない間に戦旗社の独立が実行されていった。以上が、大まかな事件の流れである。

ここで問題となるのは、鹿地と戦旗関係者の交渉過程にある「党」の存在意識である。鹿地が中央委員会召集を決定した後、鹿地を訪ねて来た窪川鶴次郎⁽⁷⁹⁾（当時文化運動から離れ、労働運動へ）は、「文学運動の私たちが、とかく全体運動からはずれた視野のせまさにおちい

りがちなことまで指摘」し、鹿地が戦旗社問題は「本当に「正しいすじ」からのものなのか」尋ねると、「いくらつかつきはなしたような笑いをうかべ、さしせまっている「党再建」のためには、それだけの覚悟も避けがたいのではないかということを示唆」したと語られている。さらに、『第二無産者新聞』記事に始まる鹿地スパイ問題に関しても、ナツプ員西沢隆二が鹿地に「責任ある立場の無新が、でたらめを書くとも思われないし。ただしようがなくて、それで困ってしまった⁽⁸⁰⁾」と語り、鹿地はこの件を、献身の半面にある「権威への卑屈」だとし、「さわらぬ神に祟りなし」というのに通じている。「戦旗」の問題の場合であれば、私たちは「神」にふれた。ナツプや作家同盟の委員会の連中は「崇り」を避けた⁽⁸¹⁾と総括している。

加えて、このスパイ疑惑に関して、当初鹿地は作家同盟常任委員会が「この記事に抗議し、訂正を要求してくれるもの」とばかり思い込んでいた⁽⁸²⁾が、外部の友誼団体の抗議を受けた上、『第二無産者新聞』自体当時非合法で地下に潜っていたため、記事の意図が伺えない状況にあったことから、自分たちの辞職で手打ちとなったと語っている。

以上からわかる点は、この一件に関与した文化運動関係者が一様に、党という存在を常と感じ取りながら判断を下して行動し、党や、それに繋がる階級新聞の権威が彼等の行動を有形無形の形で拘束するという構図が生じているということである。

加えて、党運動の文化運動に対する拘束は、あくまで概念上のものに過ぎず、上部機関が組織として責任追及を行い、処罰を行使するような実行力を持った上下関係が成り立っているわけではないのもわかる。党と文化運動の関係は文化運動側が党に寄りかかり、必要に応じてその権威を利用するというような恣意的な関係性だったのである。

また、鹿地らが職を辞した後、運動に協力したい旨を「地下に」伝えてほしいと窪川に伝えた際鹿地は、

窪川はまるで自分が「地下」そのもののように、一存で即座に返辞したではないか！してみると、三人の処分を「連絡のつかない地下」のやったことなどと、どうしていえるだろう！たとえそうだとしても、彼自身がその「地下」の有力な部分であるのは、はつきりしたではないか！何という小細工！まあいい、それははじめから察しのつかないことでもなかった。⁽⁸³⁾

という感想を抱いている。あくまで鹿地の認識上のものであり、窪川は当時、労働運動方面にいたというだけで、党員ではない。とはいえ、文化運動関係者にとつて、党の権威を振りかざし、それを恣意的に行使しているかに見られるような行動が、文化運動の局面でこの時期見られていたということを指し示しているのは確かである。

実際問題として三〇年五月から七月の時期は、田中・佐野指導部が関東近郊でアジトを転々としながら活動している時期であった。そして七月の中央部検挙以降、三〇年中組織的な党活動は行われていない。「戦旗社」問題に関し、「党のアジプロ部の下に置かれた」という表現を研究史上初めて使ったのは飛鳥井雅道である。⁽⁸⁵⁾ 飛鳥井論の根拠となっているのは、これまで引用して来た鹿地の回想『自伝的な文学史』であり、確かに鹿地は「党」という言葉を随所に使用している。

だが鹿地の語る「党」は鹿地の「感じ取った」存在でしかなく、党員から実際に何らかの強制力を行使されたわけではなく、独立した戦旗社も、その身が置かれていたとされる「アジプロ部」が実態を持たない状態にあったのである。こうした点から考えても、戦旗社問題をもって、文化運動の党運動への従属の契機とする考えは適当とは言

ない。そういう意味では『戦旗』の性格をめぐる論争として一連の問題を捉え、「芸術運動参加者自身によってその芸術雑誌としての性格を否定された『戦旗』は、つぎの段階で、同じく芸術運動参加者自身の手で、ナツプから切り離されるに至った⁽⁸⁶⁾」とする栗原幸夫の論の方が、文化運動関係者の不可視の党への自発的な、そして一方的な歩み寄りという状況を反映していると言えるであろう。

以上見て来たように、二九年から三〇年にかけての文化運動においては、党という存在が権威化し、その結果見えない「党」を騙つても違和感なく受け入れられるだけでなく、その固定化した党の権威を利用すれば、運動の方針や組織の運営に恣意的に介入出来得るという事態が生まれていたのではなからうか。まして、文化運動関係者は、以前から「党の存在を感じ、自発的に行動」する傾向を強く保持してきた。このことは以後の文化運動を考える上でも重要な問題点となる。

第四節 蔵原惟人の帰国と文化運動の新方針

三一年二月、蔵原惟人がソ連から帰国し、プロフィンテルン第五回大会宣伝煽動部協議会の決定である「プロレタリア文化教育組織の役割と任務」というテーゼを持ち帰り、それを踏まえた論文を「ナツプ」三一年六月号に「プロレタリア芸術運動の組織問題」（古川莊一郎名義⁽⁸⁷⁾）として発表した。その中で蔵原は、「プロレタリア芸術運動のボルセヴィキ化」（共産主義化・前衛党化）は「組織の徹底したデモクラシー化」（プロレタリアの意味で）によって実現されるとし、「プロレタリア的平等」の観点から労働者農民に芸術運動の門戸を広く開放し、芸術団体組織の労働者化を実現すると述べた。そしてそのための方策として工場・農村に「文化サークル」を作ることを求めた。

このサークルは必ずしも左翼的傾向の文化だけでなく、「菊池寛や講談倶楽部の愛読者」といったブルジョア芸術の愛好者をも含めた幅広いサークルとして出発し多くの人々を組み入れ、その中でブルジョア文化の階級性・反動性を曝露する「注意深い、執拗な闘争」と政治的アジプロを行い、左翼陣営に近づけることを最終的な目的とするものであった。

また同時に「労働者クラブ」（農村では農民クラブ⁽⁸⁸⁾）と呼ばれる拠点作りも訴えられた。これはソ連の「労働者クラブ」や「労働者の家」制度を取り入れたもので、小図書館（左翼出版物だけでなく、一定の割合で、広汎な娯楽のための新聞や雑誌や書籍も含む）・娯楽用具（将棋・碁から蓄音機・ラジオに至るまで、財政と要求に応じて）が備えられ、「労働者の休養・娯楽の場所」として機能し、そこでの例えば労働者の討議、学習、慰安（「文化サークル」の活動も含め）を目的に職場・地域を単位として設置することが求められていた。

つまり、「労働者クラブ」は未組織大衆を含めた幅広い労働者のための空間であり、その上で、新聞雑誌書籍の販売・普及や寄金・選挙や争議の応援、文化サークルの活動の場としても機能させながら、「時々ブルジョアのラヂオやブルジョア出版物に対して批判会等を開催し、労働者の意識水準を高めてゆく」ような形で階級的啓蒙を行うことを目的とした施設が目指されたのである。

この論文以後、『戦旗』や『プロレタリア科学』（プロレタリア科学研究所機関誌）を始めとする文化団体機関誌紙で、繰り返しサークル問題⁽⁸⁹⁾が語られ、これらの機関誌紙をテキストの一翼に据えた文化サークル（従来の「読者会」のような特定の雑誌読者に偏らない幅広い組織）を職場に作る⁽⁹⁰⁾ことが求められていった。

また古川論文は続けてナップの組織問題にも触れ、芸術中心に発展してきた日本のプロレタリア文化運動が真に共産主義運動の一翼として発展するために（反宗教・スポーツ・ラジオ・教育科学・エスペラントなどの）文化運動を統一する組織の存在が必要とした上で、ナップを解体し、他団体と共にその統一組織に加盟することを訴えている。ここで問題となるのは、『ナップ』掲載のこの論文が、三月一日の日付が付された前半部とその後書き足された後半部に別れている点である。三一年一月創刊の文化運動啓蒙新聞『文学新聞』復刻版の解題（浦西和彦⁽⁹⁰⁾）によると、帰国後すぐこの論文を執筆した蔵原は『ナップ』編集部を持ち込むも、編集部側が新方針受け入れに戸惑い、掲載を差し止めたが、五月に党が蔵原路線を支持したため、蔵原自身の増補加筆の後、六月号の掲載となったということである。

また鹿地亘の回想によると、この時、ナップ中央協議会で強い反対を示したのは中野重治・窪川鶴次郎で、「労働組合がやるべきことで文化団体の仕事ではない」という理由によるものだという⁽⁹¹⁾。確かに、古川論文の元になったのはプロフィンテルン、つまり国際労働組合組織の活動方針である。工場内未組織大衆を反動から引き離すために、組合大衆化とそのためのアジプロを求める方針を、機械的に文化運動に適用することへの疑義が出てくるのはもつともであり、それが「党の支持」で覆ることに不審感はぬぐえない。

古川論文が最初に出された三一年三月、党活動自体は新指導部（所謂非常時共産党）の下再開されていた⁽⁹²⁾。しかも蔵原はこの段階では黨員であり、過去の運動においてもオピニオンリーダーとしての実績を持ち、加えてソ連の最新の運動方針を持って帰ってきた人間である。権威的には十二分に他を圧倒し得る状況にあった。このことを確認す

るために、プロレタリア文化人としての蔵原の経歴を確認してみたい。

二六年十一月、蔵原は『都新聞』特派員として訪れていたロシアから帰国し、翌月プロレタリア芸術聯盟同人となり、『文芸戦線』編集委員の地位につく。二七年四月には『文芸戦線』に「北浦氏『アンチ福本イズム』の文献的基礎」、六月には「再び北浦氏の誤謬に就いて」を寄稿する。内容はいずれも、社会主義運動家北浦千太郎が『改造』三月号「アンチ福本イズム」で引用した、レーニン・ブハーリンの文献の誤訳・文献理解能力を批判する文章であった。またこの間『露国共産党の文芸政策』として後に出版されるロシア作家同盟大会の記録紹介や、訪ソ紀行文などを『都新聞』や『文芸戦線』等に執筆している。

同年九月、蔵原は『文芸戦線』に自身初の本格的文芸評論「マルクス主義文芸批評の基準」を寄稿した。この中で蔵原はプロ芸のように芸術を「揚棄」するのではなく、無産階級解放のための芸術利用を説いている。そして芸術作品自体も、目的意識の有無ではなく、大衆に感動を与え、アジテートするものがよい作品だと述べている。この年六月の組織分裂で、蔵原はアンチ福本イズムの立場から労農芸術家聯盟に止まっておき、言うなれば、この論文は「問題解決後」における「組織外」への批判論文である。⁹³⁾

二七年十一月、蔵原は前述のように、労農芸術家聯盟を脱退し、前衛芸術家聯盟に参加している。この組織分裂の際、蔵原は分裂行動の中心にはいない。契機となった『文芸戦線』への山川均論文掲載問題においては、折衷意見による解決を提案しているほどである。しかしながら前芸創設後は、積極的に論文を機関誌『前衛』に投稿し、一二月から進められたプロレタリア芸術聯盟との合同と並行して、プロ芸

側と、後の「大衆化論争」につながる議論を展開していった。

二八年三月のナツプ結成以後の蔵原の著述に関しては、大衆化論争の件を始め前述の通りである。加えて蔵原は、二九年一月『改造』に「最近のプロレタリア文学と新作家」を寄稿している。この論文はプロレタリア文学の発展史総括的なもので、「一九二八年三月十五日」などの新作品の評価もなされている。そして蔵原は、プロ文学はかつての問題を克服した、と高らかに宣言し文章を締めくくっている。

以上の経歴を振り返ってわかることとしては、蔵原は『文芸戦線』同人になって以降の共産主義文化運動団体における活動の中で、コミンテルン指導下の党路線からの逸脱をしていない（反福本としての労芸↓二七年テーゼを受け前芸↓ナツプ）ということである。また蔵原は、論争は常に組織内で行い、意見を組織外に持ち出す際は、組織として方針が決定した後に限定的に行っている。つまり分派的活動と見られる行動を取っていないのである。

つまり、蔵原は身をもって「模範的共産主義者」としての行動を貫徹していると言える。こうした姿こそが、三・一五事件以後、不可視となった党及びその運動を可視化させる試みを模索していた文化運動団体にとって、一つの規範となり、党運動の権威性を参照し得る存在として、蔵原にロシア語・ロシア文化運動に詳しいというその当時の日本で特異だった才能に基づく重要性以外に、さらに大きな「余人をもって代え難い」重要性を付加し、文化運動の主導的存在にまで押し上げるようになったのではないだろうか。むしろ、蔵原の理論が文化運動内において積極的に展開され、運動を主導していったという事実を否定するわけではないが、蔵原が文化運動内で権威的存在となり、周囲の人間が彼を官憲の手から守り抜いたことを戦後に至るまで誇り

として語り継ぐような存在であり得たのは、蔵原自身が、プロレタリア文化人にとって規範となるような革命家的行動を、文筆等を通して実践して見せていたことに対する敬意の念が作用したという一面も考慮する必要があるのではないだろうか。

話を古川論文受容の件に戻す。前記のように、蔵原は権威ある存在であったにも関わらず、三月の段階の文化運動関係者は蔵原案を統一指導理論とすることを留保したのである。確かに組織の全面的改定と、それを軸にした大々的な大衆への啓蒙活動という実践への没入が求められたという事態は、ナツプ中枢としても権威だけでは押し切れない大問題ではあった。この段階のナツプ中枢の行動を単純に躊躇とも、またナツプの民主性の発現ともみなし得る。がしかし、古川論文が棚上げ状態となっていたことだけは事実である。

では、三月から五月にかけて何が起こったのか、この時期の文化運動関係者の活動に関する証言を見つめる。先にも触れたプロット員生江健次は予審訊問調書⁹⁵で、三一年一月に「松村」と名乗る男から入党を勧められ、それを承諾したことを述べ、次いで三月頃から、同じく黨員の宮川寅雄、そして生江が入党仲介者となった手塚英孝の三人で会合を定期的に持ちながら、窪川鶴次郎・野川隆・宮本顕治らと連絡を付けるようになって初めて、党と作家同盟の関係が出来、ナツプに対する働きかけが、ナツプ員兼黨員であった生江らによって行われ始めた⁹⁶と語っている。

その後、五月上旬に、党と連絡を付けたがっていた蔵原と生江らが接触し、会合を開いて前述の蔵原案に関する協議が行われ、ナツプ加盟各団体に党フラクション（党員会議・細胞）を作る必要性が提起され、生江と同じ演劇同盟員の村山知義や、杉本良吉、作家同盟員の宮

本顕治らを入党させ、党文書の配布などを生江経由で行ったという。

以上の流れが三一年三月から五月までの党と文化運動の接触過程であるが、古川論文をめぐる問題に関しては、基本的に生江らを中心とする文化人黨員主導で運動方針討議を行っていたこと、そしてこの状況の主導者の一人である生江健次が、古川論文への反対者であった窪川鶴次郎や、戦旗編集部野川隆と連絡関係にあったことが大きな特徴として挙げられる。つまり、三月の時点では蔵原は党と連絡を付けておらず、党とナツプの関係も出来上がったばかりで、文化運動関係者同士の連絡線によって保たれた細いものであった。しかし五月の時点ではその連絡関係に蔵原が入ってきて、文化団体内部に文化人黨員の会合組織が出来始め、その討議で古川論文が明示した方面への運動方針の転換に向けた動きがスタートし始めていた。この状況を連絡線を通じて把握したナツプ側がこの「黨員」による規定路線を追認⁹⁷（或いは黙認）した結果、六月号の古川論文掲載という事態に立ち至ったと考えて差し支えないだろう。この間、党中央からの明確な指示などは、生江の調書を見る限り存在しない。黨員であることを認めた上での調書という性質から、党の運動への関与を否定する意味はない文書であるため、党からの直接の関与はないものと考えざるべきである。

『運動史研究』³に所収された生江調書の解説で栗原幸夫は、プロレタリア文化団体内の党组织結成は松村ことスパイMの「指導」で行われ、党フラクション員のメンバーは生江から松村へ逐一伝えられ、文化聯盟結成後松村は生江との連絡を切り、一九三二（昭和七）年三月末から四月にかけての文化団体一斉検挙でフラクション員は、ほぼ一網打尽にされたと述べている。文化団体の構成員把握のために松村が生江の線を利用して情報を集めた点是否定し得ないが、文化団体に

関する松村の「指導」に関しては異論を唱えたい。

調書からわかるのは、前述したように党フラクション結成及び、蔵原路線の決定過程を主導したのは他ならぬ生江ら文化人党员であり、上の方へはあくまで報告・連絡を行っていたに過ぎない⁹⁹ということである。党员となっても、彼等文化人は入党以前と同じく、文化人集団の討議で方針を決め、活動を行うという状況には変わりがない。そこには党指導はなく、活動方針を転換する上で党の「権威」が、その権威を受け入れた集団の運営に無形の影響を与えただけなのである。

古川論文発表後、この方針の具体化の動きが徐々に進められ、ナツブ傘下の文化団体に加え、プロレタリア科学研究所や新興教育研究所などをも巻き込んだ統一的文化組織連合結成へと向かっていった。

そして三二年一月末、日本プロレタリア文化聯盟（コップ）という全国的統一組織が誕生し、プロレタリア文化運動は新たな段階へと進んだ。しかしそれは同時に、権威性によって一方では強固に支えられながらも、もう一方では党员文化人の行動に依存した組織運動という一面を持つ形で運動をスタートさせることをも意味しており、問題性を内包した再出発となっていたことも忘れてはならないだろう。

おわりに

日本のプロレタリア文化運動は、社会運動内部において文芸者が自らの有用性を主張するという点から出発したところに、その大きな特徴が存在する。加えて、日本においては、ロシア型革命の概念上社会運動を指導するものとされた共産党の存在が、無産運動勃興期間の全体を通して極めて不可視的な状態であり続けたというもう一つの特徴

が存在した。この状況が相互に交錯した結果、文化運動が党運動に対し、憧憬にも似た感情から、自ら歩み寄り始め、党及び運動の可視化を積極的に模索していくような運動の形が成立したのである。

また、文化運動が組織的展開を見せ始めた二五年から二七年の時期にかけて、『なにをなすべきか』に代表されるレーニンの原典が日本語訳され、同時に福本和夫によって引用される形で日本に齎されていった。加えてスターリンによるレーニンの解釈著作もこの時日本の大衆の前に姿を現した。こうした形で理論的混淆が起こる中、福本・レーニン・スターリンが相互に担保し合う形で、日本の社会運動における事大主義的要素を色濃く含む権威構造が形成されていった。

その影響は、彼等の著作を読み、理論を摂取する能力に長けた知識人層により強く見られ、文化運動もその影響力を強く受けることとなった。つまり、文化運動においてもこの時期、権威となる存在、「模範的共産主義者像」を強く求める傾向が加速し、無産者新聞や労働農民党といった見える権威に接近しながら、運動組織の強化と、より強固な運動を求めて組織の「分離・結合」を通じ、共産主義運動者としての修練を模索していくことになる。

二八年以降、大衆に広く日本共産党の存在が知られるようになった後も、組織としての党の不可視状態は続いていた。そうした中で、文化運動はそれ以前と異なり、存在が明確化した党の可視化を積極的に進め、党の目標やスローガンなどを含む党の存在を強く大衆に訴えるための行動を、著作や理論の展開により積極的に推し進めていった。

この活動を通じて、身近な「党的存在」「模範的共産主義者」として立ち現われて来たのが蔵原惟人である。蔵原は理論面で文化運動を主導すると共に、職業革命家として模範的な行動を文化運動関係者に

披歴することで権威を確立し、あるべきプロレタリア文芸者・黨員としての目標存在として文化運動関係者に強い印象を与えていった。

その一方で、文化運動関係者が不可視の党の存在を自ら感じ取る傾向には一層拍車がかかり、組織運営上の諸問題解決に際しても、党の存在を感じ取った構成員が、架空の「党の意向」に沿うような行動をする状況が、少なくとも三〇年以降はある程度常態化していく。

三一年の蔵原惟人提案による文化運動組織再編過程はそうした党意識が大きく作用した結果の産物である。文化人が黨員となり、黨員文化人の合議体（フラクション）を作り、そこから文化運動組織を動かすという形は、模範的共産主義者文化人によるミニマムな「党」を、文化運動関係者と党の中間に設置することで、黨員文化人が自らの手で党指導の概念を局地的に発現させたことを意味するのである。

しかしながら、こうした黨員文化人に文化運動が委任されるような運動の形は、黨員文化人のトップであるアジプロ部長に「指導」が可能な蔵原が収まっている状態において最大限作用し得る、つまり模範的共産主義者の行動・理論に支えられた不安定なものであった。

そのため、蔵原が検挙された三二年春以降、このシステムは揺らいでいく。蔵原の後を継いだ小林多喜二・宮本顕治は蔵原の残した「模範的共産主義者」というあり方を彼らなりに模索しつつ、運動の堅持を目指し、「党の作家」とは、プロレタリア作家としての最高の段階⁽⁴⁾という語りに示されるような、ある種の「賢人」による組織運営を理想的目標とし、活動した。だが、党運動自体の退潮期において、こうした対応は蔵原路線墨守、現実への適応能力の欠如に繋がり、その後の文化運動に大きな問題を齎していくことになる。

註

(1) 代表的な研究としては、飛鳥井雅道の論文集『日本プロレタリア文学史論』（八木書店 一九八二）や栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』（平凡社 一九七一 増補新版 インパクト出版会 二〇〇四）などが挙げられる。党指導の問題に関しては特に飛鳥井の影響が大きく、後述する鹿地亘の回想に強く依拠したナツプ期の党指導の実態定義に関する論述は、研究者に大きな影響を与えている。

(2) 川口浩「青春の雰囲気」『文化革命』一卷八号（日本民主主義文化連盟 一九四八）二二頁。

(3) 飛鳥井雅道は複数の著作で「文化運動によって政治運動を代行させる」発想は一九二二（大正元）年に大杉栄・荒畑寒村らが創刊した『近代思想』まで遡るとしている。「社会主義冬の時代」に堺の「売文」と異なり、「生の拡充」など運動（直接行動的な）へ繋がり得る思想を世に送り、大衆の目覚めを促す役割を果たした点で「プロレタリア文化運動」の起点とする考えは否定し得ないが、『近代思想』終刊後の大きな断絶（飛鳥井説に基づく）と宮島資夫ら「大正期労働文学」を『近代思想』の延長線上に置いて二〇年代以降に繋ぐことが可能ではある）及び、階級対立と革命が現実化した二〇年代とそれ以前とは無産階級運動内における「文化」の位置付けや理論的背景が異なるため過度な遡及はすべきでないだろう。

(4) 小牧近江「恩知らずの乞食」『種蒔く人』二二年二月号（日本近代文学研究所編『種蒔く人』復刻版 一九六二）八〇頁。

(5) この運動には、とりわけ芸術系知識人においては「ロシア文学

の故郷の危機」という意識からの救済運動への参加が見られた(秋田雨雀「飢えたるロシアのために」(『東京朝日新聞』二十一年九月九日)がそうした観点からの言説の例)。白樺派を中心とした人道主義文学の隆盛の時期だったことを考えると、その源流であるトルストイの作品などを生んだロシアの危機という展開の仕方
は知識人にも、大衆にも大きなアピール力を持つものであったのは間違いない。

(6) 『種時く人』二十一年一〇月号 復刻版 一八頁。

(7) 同 一九二二年六月号 復刻版 四五四〜四五五頁。

(8) 山川均主催の理論誌『前衛』二十二年七月号に掲載された、山川「無産階級運動の方向転換」によって示された、運動の大衆化のため、社会主義者が大衆組織の中へ入り、広範な運動展開のための「共同戦線」とそれを遂行する組織建設を訴える理論。後にこの理論は、共産党解党の根拠となったり、合法無産政党中央派を共同戦線党とする労農派の指導理論となったりする形で無産運動に長期間影響を与える。

(9) 『種時く人』二十二年六月号 復刻版 四六七〜四六九頁。

(10) この点は『東京朝日新聞』二十三年八月二五〜三〇日に掲載された青野季吉「解放線と芸術運動」にも記されており、実践運動せよという言説の生まれる原因として、反対陣営においては既存文壇の階級芸術への排外思想を、味方陣営においては解放運動において各自が依拠する戦線に没頭することで他戦線への理解を欠くこと及び芸術は享楽階級の所産という嫌悪・蔑視をそれぞれ指摘している。

(11) 『種時く人』二十三年二月号 復刻版 一二二頁。

(12) この傾向を顕著に示す文章が山川均「『方向転換』の危険性」(『マルクス主義』一九二四年六月号(法政大学大原社会問題研究所編『マルクス主義』覆刻版 一九七一〜七三)である。この中で山川は、「決定的の闘争のために、無産階級の大衆の、階級の成熟を促進する」ため、大衆の運動への拡大と無産階級の運動水準上げが必要で、そのために大衆の運動参加を促す必要から「階級意識のおくれてゐる無産階級の大衆の、当面の要求に妥協する」ことを訴えた(二〇八頁)。

(13) 金子洋文『種時く人伝』(労働大学 一九八四) 四六頁。

(14) 『マルクス主義』二十五年六月号 九七〜九八頁。

(15) 同 一〇三〜一〇四頁。

(16) 同 一〇七頁。

(17) 二五年一月にソビエトでトロツキーが人民委員を解任され、「左翼反対派」が敗れたことも、『マルクス主義』誌を含め当時の日本にも伝わってきており、「分離」の発現の一例として受け取られたであろう。福本理論の隆盛にはこうした直近の客観的状況変化が理論に適合的であったことも大きく作用している。

(18) 『マルクス主義』二五年一〇月号 一九頁。

(19) 同 二五年六月号 一〇九頁。

(20) 『東京帝大新人会研究ノート』一六号(慶應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会 一九九四) 二二頁。

(21) 石堂清倫「わが異端の昭和史」上(平凡社 二〇〇一) 九八頁。

(22) 『東京帝大新人会研究ノート』一四号(一九九二) 一〇九頁。

(23) 布施勝治「レーニンのロシアと孫文の支那」(燕塵社 一九二

七) 二九〜三〇頁 布施は東京日日(のち大阪毎日)新聞のロシ

ア特派員として、レーニン・スターリン・トロツキーらと会見。

そうした模様や、ロシア滞在時のルポをまとめた書籍を複数出版している。

(24) 同 三六頁。

(25) 『文芸戦線』一九二五年八月号（日本近代文学館『文芸戦線』複製版 一九六八） 七頁。

(26) 『文芸戦線』一九二六年九月号 三〜五頁参照。

(27) 『日本プロレタリア文学評論集』3 「平林初之輔、青野季吉集」（新日本出版社 一九九〇）解説（祖父江昭二） 四四二〜三頁参考。

(28) 「理論的闘争の意義」（八月）「大衆の自然成長性と社会民主主義の目的意識性」（九月）の表題で掲載。

(29) 無産者新聞社とマル芸の学生とを繋いでいたのが、門屋博・是枝恭二である。共に新人会出身で、マル芸の中心メンバーとは先輩後輩の関係に当たり、「自分の顔を知っている人間を呼び寄せ」（前掲『東京帝大新人会研究ノート』一四号「石堂清倫氏に聴く」一〇七頁）ることで無産者新聞とマル芸の緊密な関係が生まれていった。

(30) 『種時く人』からの運動者佐々木孝丸は後年の回想で、「何しろ秀才揃いの帝大生の中で、さらに『アタマの良い』選り抜きの連中が、『マルクス主義の理論で武装』しているのだから、大抵のものが、理屈では太刀打ち出来ずにねじふせられた」（佐々木孝丸『風雪新劇志』（現代社 一九五九）一一一頁）とマル芸関係者を語っている。

(31) 『文芸戦線』二七年二月号 一七〜一八頁。

(32) 『文芸戦線』二六年二月号 七頁。

(33) 加えて『無産者新聞』主催のイベントを任されたということも大きい。村山知義は後年「当時われわれが全幅的に信頼し、知識とし、良心としていた新聞」（村山『演劇的自叙伝』3 東方出版社 一九七四 一六頁）と語っており、佐々木孝丸も、「（無新の）論旨や指示を忠実に守り、この新聞を全幅的に支持することが、当時の左翼青年たちの「階級的良心」を証明する「あかし」のようなのだとされてきた。それでこの新聞の御託全に対しては、何事によらず鞠躬如と服従するというのが、左翼インテリの風潮だったのである。」（佐々木前掲書 一〇九頁）と述べるなど、無産者新聞のために行動することで、運動者として認められたという意識が若い文芸者たちにあったことは否めない。アナキズムから転じた壺井繁治も党（労農党）や青年同盟の活動に対し、「強要」とか「義務」とかいうには、あまりに新鮮な精神の泡立ちをわたしの内部に惹き起こした。わたしはアナキズム運動の類廃と決別し、マルクス主義的な運動に対して、いわば素朴な、恋人へのような情熱を傾けていた」（壺井繁治『激流の魚』立風書房 一九七七 二一七頁）と語っている。

(34) 『文芸戦線』二六年二月号 五四〜五五頁。

(35) 二六年に、埼玉県南畑村（現富士見市）の農夫渋谷定輔の詩集『野良に叫ぶ』が出版され、大きな反響を呼ぶなど、農民の手による文学（農民文学）の萌芽はこの時期存在していた。また同年七月号の『文芸戦線』に掲載された山田清三郎「文芸小惑」によると、一年間の読者層概観では都市労働者・小作人青年・学生の手順で、読者の多い県として東京以外では長野・福岡・新潟・秋

田・兵庫という比較的農村圏に広がっている様子を示している
(六四頁)。

(36) 『文芸戦線』一九二七年一月号 一一三頁。

(37) 『プロレタリア芸術』二七年八月号「労農芸術家聯盟に関する
テーゼ」によると、三月二十九日の聯盟臨時総会後、労芸関係者の
ポイコットを受け、その後文芸戦線機関誌化等の要求も拒絶され
た。六月五日のプロ芸文芸講演会で、意見対立に触れないとの協
定を無視した暴露が行われた。こうした経緯を経て聯盟拡大中央
委員会で反対派の除名が決定した、とのことであるという(同号
二〇六頁)。

(38) 佐々木前掲書では「文芸戦線社では、折角苦勞に苦勞を重ねて
ここまで盛り育ててきた雑誌を、福本イズムの極左小児病者たち
に譲り渡してなるものかと、この申出を拒絶した。プロ芸の新幹
部たちが、この拒絶を快からず思うのは当然で、文芸戦線の同人
たちは、口にプロレタリア文学を称えながら、その実、封建的繩
張り意識から脱しておらず、階級的良心を持ち合わせていない—
というふうには、「批判」した。」(二二九―二三〇頁)と語られて
いる。こうした対立は分裂後、レットテル貼りを理論で正当化する
形で表面化していく。

(39) 『文芸戦線』二七年二月号 六〇九頁。

(40) 鹿地巨『自伝的な文学史』(三一書房 一九五九)によれば、
新人会の合宿では枝恭二にプロレタリア文芸に関する所論を尋ね
られ、政治運動へ向かう「方向転換」の必要性を訴えた上で、木
崎村争議の応援などでの経験から「文芸派批判」に悩んでいた鹿
地は文芸から離れるつもりだと話したところ、無産者新聞編集部

にいた是枝は、鹿地の「方向転換」を支持し、無新でその方向へ
向かう運動を起こす計画を語り、運動を「非政治的」にしている
林房雄を批判する論文執筆を依頼した。鹿地は中野重治にやらせ
ることを主張したが「林と個人的に近すぎる」という理由で書い
たという(四六〇―四七頁)。

(41) 鹿地論文以後、二七年上半期の『文芸戦線』誌上には芸術運動
の副次性や宣伝煽動を第一の任務とするスタンスから書かれた論
文が多数見られる(三月号 佐野袈裟美「マルキシズムに立脚す
る大衆運動」や五月号 山内房吉「文芸運動の限界と任務」な
ど)。こうした文章では、「解放運動の行進曲」(佐野)「無産階級
のラッパ卒」(山内)など明らかに鹿地論文の影響を受けたであ
るう言い回しまで見られ、『文芸戦線』誌上でのプロ芸系の思想
的影響力の強さが伺える。

(42) 『改造』二七年六月号 八二―八三頁。

(43) 『プロレタリア芸術』二七年七月号 三四―三六頁。

(44) 『文芸戦線』二七年十一月号 六〇七頁。

(45) 門屋博「林房雄との五十年」(林房雄『消えぬ夢』一九八二
所収) 一八二―三頁。鹿地の証言とも一致している(鹿地前掲書
四六〇―七頁)。また、これ以後鹿地は是枝らの後押しを受け、「肩
で風を切るような勢」を見せ、『文芸戦線』派除名の最強硬派も
彼だったという太田慶太郎の回想(太田慶太郎『私の歩んだ道』
一九八六 六七頁)がある。前述の林房雄論文と同様に、「無産
者新聞」とその関係者が文化運動にとって権威となっていた証拠
となる。

(46) 『新潮』二七年五月号 六一頁。

(47) 訳者は田中九一。元新人会員で、当時満鉄東亜経済調査局勤務。『社会思想』誌では主に海外の運動情報欄を担当。

(48) 『マルクス主義』二八年一月号 三頁。同号編集後記では、コミンテルン「批判」についての論究が遅れた理由は「完全なる内容を知り、これに対する十分なる攻究をする必要があると考へた」ことと、「理論的批判、意識の転換といふ事のみを以つて始めるべきでなく、現実の政治的任務―労働者大衆の闘争を具体的に進展せしむべき―を遂行するための、あらゆる準備を以つて始めなければならぬと信じた」ことの二つだと述べている(一一〇頁)。同誌は不完全な訳を元に議論をしないというスタンスを一貫して維持していた。

(49) 『文芸戦線』二七年二月号 五〇―五八頁。

(50) 『労農』二七年二月号 荒畑寒村「セクト主義の清算」など。

(51) 佐々木前掲書では、一二月分裂時に、「労芸の分裂に際して、プロ芸側では逸早く、「我等の全戦列より意識的折衷主義者を駆逐すべき現在の瞬間に於ける、最も重要なこの闘争に於て、わが日本プロレタリア芸術聯盟は、前衛芸術家同盟を支持するのである」というような、相変わらず福本宗の臭気ふんぷんたる文章ではあったが、とにかくそういう声明を發して、前芸に好意をよせ、合同の機運を醸成しようとしていた。」(一五七―一五八頁)と語られている。

(52) 『前衛』二八年一月創刊号 一八―二三頁。

(53) 針生一郎「ソヴェト文芸理論と日本プロレタリア文学」(『文学』四七(九)岩波書店 一九七九)では、テーゼ訳文執筆以降、蔵原が「いわばコミンテルンの権威をおびた分裂状況の調停者と

して頭角をあらわす」(二一五頁)と述べられている。分裂状況の調停者という面は、否定し得ないが、テーゼの訳者であることが、蔵原の権威を担保したのではなく、この時期以降蔵原が本格的にプロレタリア文芸理論の表舞台に登場し、模範的共産主義者としての蔵原の振る舞いが人々の眼に触れる状況になったことも大きいのではないか。

(54) 村山前掲書では、「マルクス主義芸術学」が日本で知られていなかった時代、蔵原の諸論文は「今まで、どうもこうは見えるが、そうズバリいったら、反駁されてしまいはしないか、などとイジイジしていたものが、一遍に吹き飛ばされ、同時に、これこそが真理だったのであり、真理とはその根本において、こういう風に明晰されるものなのだ」という理解がハッキリついた」(三四四頁)というように、文化運動関係者に、理詰めの説明法と、ソ連の理論の利用法・それを用いた運動理論の体系化の面で大きな示唆を与え、運動へのステップを踏み出させる契機となったことが述べられている。

(55) 二七年二月のプロ芸第一回全国大会では「芸術戦線統一に關する決議」が採択されているが、その実行方法三項目の冒頭に、「前衛芸術家同盟に合同を提議すること」が挙げられていることから、プロ芸の組織合同への強い意欲が伺える(内務省警保局編『社会運動の状況』昭和二年 一三二―一三三頁)。

(56) 総連合の活動自体は、二八年五月に反戦作品集『戦争に対する戦争』を出版しただけで、自然消滅してしまう。二八年三月末以降、蔵原を中心とするプロレタリア文芸人の多数の関心がナツプの活動に移ったことが要因として挙げられるだろう。

(57) 川口浩(前芸)は後年、二七年テーゼによって、「革命運動の最高指導方針は一本のふとい線で貫かれた。それに賛成であるかぎり、芸術運動が一つにまとまれないはずなかつた。合同会議ははじめから成功を前提されていた。問題はたゞ芸術運動の具体的な方向にかんするだけだつた。」(前掲「青春の雰囲気」二二頁)と述べており、両組織が運動思想面において同一地平にいたことは明らかである。

(58) 川口浩前掲「青春の雰囲気」二二頁。

(59) 太田慶太郎「ナツプ創立前後」(『文化評論』(一六) (日本共産党中央委員会 一九六三) 八四頁)。

(60) 鹿地亘「再びプロレタリア芸術の進む道について」(『プロレタリア芸術』二八年四月号)や、蔵原惟人「生活組織としての芸術と無産階級」(『前衛』二八年四月号)がその例。共に合同後の両者の主張と重複する内容を多く含み、合同交渉が長引いていた場合、両誌を舞台に「大衆化論争」が行われていた可能性を示唆している。

(61) 中野重治「いわゆる芸術の大衆化論の誤りについて」(六月号)。鹿地亘「小市民性の跳梁について」(七月号)。蔵原惟人「芸術運動当面の緊急問題」(八月号)。中野「問題の振じもどしとそれについての意見」(九月号)。蔵原「芸術運動における「左翼」清算主義」(二〇月号)。以上の論争を経て、ナツプの公式声明ともいえる中野「解決された問題と新しい仕事」(二一月号)で論争は終結する。

(62) 山田清三郎「戦線統一から具体的な活動へ」(『戦旗』二九年一月号(戦旗復刻版刊行会『戦旗』復刻版 一九七六〜七七)に

も、ナツプ成立当初、全国的統一組織が望まれていたが、地方別組織を取らざるを得なかつた理由として、「嘗て我々が芸術戦線において犯し来つたところの重大な誤謬と、過失の具体的な現はれ」即ち、無意味に分散対立せる芸術戦線をして、いかにしても速かに収拾統一するの必要があつた」(二二〇頁)と述べられており、論争に一定期間をかけることと、それを速やかに終わらせることが必要であつたと言ふ認識をナツプ員も持っていたことが伺える。

(63) 三〇年九月の全農青年部代表者会議「少年部対策の件」(中村 拡三編『資料集成 小さな同志』日本におけるピオネール運動その全貌) I (『資料集成 小さな同志』刊行委員会 一九九三) 三四九頁)や、三二年七月の「全農少年部組織方針(案)」(『新興教育』一九三一年七月号(『新興教育』復刻版第四卷 白石書店 一九七五) 三〇〜三二頁)に『少年戦旗』の活用に関する記述が見られる。

(64) 『戦旗』二九年四月号 八八頁。

(65) 同 八九頁。

(66) 『戦旗』三〇年四月号 三六頁。

(67) 同 三九頁。

(68) この点に関しては、栗原前掲書や竹内栄美子「プロレタリア文学運動とソヴェットロシア文学理論」(『文学』四(二)二〇〇三)に詳しい。

(69) 『社会運動の状況』昭和四年には、党中央委員市川正一がロシアからの帰路、上海のコミンテルン極東ビューローで資金受け取りの打合せをし、帰国後中国人連絡員を介し、二八年一月月から

四回に分けて六千五百円余りの資金を受け取ったとの記述がある(八五頁)。こうした行動も、市川や渡辺政之輔のようなビュローと関わりのある党関係者が検挙された四・一六事件以降困難になっていく。

(70) 同 昭和五年 八六頁。

(71) 同 昭和四年 六九〇七〇頁。

(72) 同 昭和五年 六二頁。

(73) 平出禾『プロレタリア文化運動に就いての研究』(柏書房 一九六五 司法省調査部 一九四〇の復刻) 五四二頁「蔵原惟人予審終結決定」参照。

(74) 『社会運動の状況』昭和五年 五八頁。

(75) 「生江健次予審訊問調書」(『運動史研究』3 三一書房 一九七九) 一七五〜一七七頁参照。

(76) 手塚英孝「神吉洋士のこと」(『文化評論』(八〇) 一九六八『手塚英孝著作集』第二巻にも所収) 参照。

(77) 村山前掲書 四二五頁。また、『社会運動の状況』昭和五年の記述によると、「意志鞏固ニシテ理解アル者ニハ党ノ活動資金ナル旨ヲ打明ケ、其ノ他ノ者ニハ救援資金或ハ無新基金ノ名目ニテ募集シ、前者ニハ領収書ニ換ヘテ党印刷物ヲ授与シツツアリタリ」(八六頁) というように、資金と引き換えに党印刷物を受け取っていた人間は、少なくとも、党資金と理解して提供しており、意識的な行動だったと言える。しかし、この「意識性」は文化人にとっては間に蔵原を通して発現されるものだったことは考慮に入れる必要がある。

(78) 鹿地前掲書 九六〜一一一頁参照。

(79) 同 一〇三〜一〇五頁参照。

(80) 同 一一〇頁。

(81) 同 一一七頁。

(82) 同 一〇九頁。

(83) 同 一一一頁。

(84) 鹿地は戦旗社問題に関し、江口渙に対しても、「あの青二才どもが、党を笠にきてさもえらそうなツラをして強引にのしかかって来たときには、よっぽどなりつけてやるうかと思ったんだが、やっと腹の虫を殺してがまんしたよ」(江口渙『たたかいた作家同盟記』上(新日本出版社 一九六八) 三一〇頁) と語っており、戦旗社側が少なくとも党の権威を問題解決のために用いている様子が伺える。

(85) 飛鳥井前掲書 一二〇頁。

(86) 栗原前掲書 増補新版 一〇八頁。

(87) 『ナップ』一九三二年六月号(戦旗復刻版刊行会『ナップ』復刻版 一九七八) 三〇〜四六頁参照。

(88) 『プロレタリア文化』一九三二年二月号(戦旗復刻版刊行会『プロレタリア文化』複製版 一九七九) 七〜九頁参照。

(89) 『ナップ』三一年八月号 中野重治「通信員、文学サークル、文学新聞—文学運動の組織問題に関する討議の結果」など。

(90) 『文学新聞』復刻版(五月書房 一九八九) 一五九頁。

(91) 鹿地前掲書 一三六頁。

(92) クートベ(東洋勤労者共産大学) 留学から帰国した風間丈吉が「党の唯一の生き残り」を名乗る松村(スパイM)と接触したのが三〇年一二月で、岩田義道・紺野与次郎らを加えた形で党再建

ビュローが作られたのが三二年一月である。月末には『赤旗』も復刊されており、「非常時共産党」のスタートはこの時点とすべきだろう。(立花隆『日本共産党の研究』二 講談社文庫 一九八三参考)。

(93) 『改造』二七年六月号の蔵原文論「所謂プロレタリア文芸運動の『混乱』について」も前述したように、これとほぼ同様の観点から、芸術の利用を訴え、プロ芸を批判する内容となっている。時期的にも組織分裂後の文章である。

(94) プロレタリア画家永田一脩の回想(『美術運動』一〇四号(日本美術会 一九七七)七八頁)や、ナツプ員松本正雄の回想(松本正雄『過去と記憶』(光和堂 一九七四)十三章・十四章)などにおいて、黨員だった蔵原をかくまい、自身が検挙されても居場所を官憲に教えず、無事ロシアに送りだしたことが誇らしげに語られている。

(95) 前掲生江健次予審問調書 一七五〜二〇七頁参照。

(96) 窪川鶴次郎は戦後生江、手塚が文化運動と党運動を関係づける試みの中心にいたと語り、窪川らが作った作家同盟の方針書などを手塚が「上級機関の討議」にかけるという手続きがあったことについても傍観者のな言い方で触れている(『闘いのあと』(民主評論編集部編 一九四八 一三三・一三九頁)。窪川のこの証言に従えば、前述の戦旗社事件で党の権威を仄めかしていた窪川は、実際は党と繋がっていないことになり、架空の党の権威利用の証拠になるだろう)。

(97) 蔵原路線採用の背景としてもう一つ、三二年五月の作家同盟大会が、中央部批判を含む混乱の中、流会を招いていたという事態

が挙げられる。江口前掲書では、こうした中、五月末の中央委員会で小林多喜二が音頭を取る形で中央委員の自己批判と文化サークル路線等の採択がなされたことが、かなり劇的な文章で描かれている(江口前掲書下 七〇〜七三頁)。この時の作家同盟、ひいてはナツプ全体として見ると、文化人黨員による主導は、まさに渡りに船の状態であり、三月に出来なかつたラディカルな変革が五月に可能だった理由の一つはこの点にもあると言えよう。

(98) 『運動史研究』3 一七三〜一七四頁。

(99) 生江が松村の指示を仰いでいることが一度だけあるが、モスクワで開かれる国際労働者演劇同盟の総会に日本代表を送るべきか否かに関し、蔵原の賛成意見を踏まえて意見を求め、松村も賛成し、それを蔵原に報告したという件だけである(生江前掲文 一八七頁)。

(100) コップ書記局員池田寿夫は、獄中手記で、文化運動は「一般的な政治常識で指導」出来ぬので、蔵原のような内部の特殊事情に精通し、かつ「厳密な党の立場を守り抜ける」者のイニシアチヴに期待し、党は結果を聴取するに止まったと述べている(池田寿夫『日本プロレタリア文学運動の再認識』三一書房 一九七一 二二二頁)。

(101) 小林多喜二「右翼的偏向の諸問題」(『プロレタリア文学』三二一年二月号(日本近代文学館『プロレタリア文学』復刻版 一九七二)堀英之助名義)二五〜二六頁。最も革命的な政治家であることと、最も革命的な作家であることは、「党的実践に於いて不可分離に統一」され、政治と文学が完全統一されると小林はこの文章の中で述べている。